

ハイスクールD×D
俺はロリハーレムを
作ってやるぜ！！

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

これは1人の男が間違つて殺され、ロリハーレムを作る為に神様転生せれる。変態の記録である。

これは酷いっと思つています。

b y 作者

目次

神様転生

転生します

1

二天龍、別に倒しても構わないのだろ

う？

25

これは健全な恋愛です。ホントだよ

43

旧校舎のディアボロス

新たなロリっ子発見じゃあ！

73

俺の逆鱗に触れた奴は死ぬぜ

118

俺の彼女がこんなに正妻なわけがない

140

俺って潜入捜査苦手なんだよね

166

バイサーに合掌をしてあげてくれ

200

嫁さんは見た！

219

神様転生

転生します

「……………んっ……………んっはっ……………」

俺が目を覚ますとそこは真っ白な空間が広がっていた。

俺は周りを見てみるがやはり何も無い。

俺は立ち上がりどうしてここに居るのかを思い出す。

「……………あっ！」

思い出した。俺は確か学校を帰る途中殺人鬼に襲われて死んだんだった。

「でも何で俺生きてんだろ？てかやつぱ何でここに居るか分かんねーし！誰か居ねーのかよー！」

俺は叫びながら周りを見るが人なんてどこにも居ない。

俺ってここで一生独りぼっちなの？

え？嘘だよな？そこはテンプレで転生してくれるんじゃないの？まさかここが地獄なの？閻魔王様素道りで地獄に来ちゃったけど大丈夫なの？てか神様早く来いよ！
何で来ねーんだよ！まさか神様は焦らしプレイが好きなのか！なら仕方ないね。

「そんな趣味はないわ！」

後ろから突っ込みが入る。

はあやつと来たか、どんな奴だ？一発殴ってやらねば！

そう思い振り返ると、フリフリのドレスを着た幼女がいた。

「俺と結婚して下さい！」

「何でそうなる！」

だってしょうがないじゃないか可愛いんだもん。結婚したいと思うのは仕方ない事

じゃないか。」

「か、かわいい…って……………／＼／＼／」

はっ！心の声がつい出てしまったようだ。まあ仕方ないね。それぐらい可愛いんだもん！PrPrPrしたい♡

「この変態があああああー！」

そう言って幼女がどこから出したかわからないがハリセンで俺の頭を叩く。こんな幼女に叩かれるんなら俺はMにもなれるね！

「ひひひひひひー！」

神様が逃げるように俺から距離をとる。

ふふふ、照れてるのかな？かわいい♡

「照れてないわー！」

あれ？今は声に出して無いのに何でわかったんだ？

「それは私が神だからよー！」

「なるほど納得だわ。それにしても神様って何でそんなかわいいの？キスしてもいい？
てかもうここで俺と結婚しよ♡」

「もう話が進まないじゃないか！少しは黙ってて！」

「ひどい！俺は神様に愛を囁いているだけなのに！」

そう言うと神様が頭を抱えて出す。

そんな神様もかわいい♪

「はあ…。ここまで疲れる奴は初めてだよ！」

「それじゃあ初めて記念に結婚しよ！」

「もう黙ってって言うてるでしょ！」

「わかったよ。神様をこれ以上困らせる訳にはいかないし。」

そう言っつて俺は黙る。

「はあ…。やつと話が進められる。もうここで約1000字使ってるんだよ！」

「神様メタいですよ。」

「はあ…。私疲れてるのかな？」

「神様疲れてるの？俺に何か出来る事ない？」

「疲れてるのは貴方の所為よ！兎に角貴方は黙っててくれればいいから。」

神様が疲れたようにしている。ちよつと興奮し過ぎてしまったようだ。これからちゃんと神様の言うこと聞いこう！そして話終わったらプロポーズをしよう！（・ω・）
（ ）キリッ

「……………もう突っ込まんからな。」

「もう神様様のいけずー！」

「……………。」

ほんとに突っ込まなくなった。詰まんないな。

「……………神様これからちゃんと聞きますから何か喋って下さい。」

俺は土下座をする。これをすれば大抵の人が許してくれる。

「はあ…。わかったからもうボケないでね。そうじゃないとおじさんの姿になっちゃうぞー！」

神様がいい顔でこつちを見てくる。

な、なんだって？こんなかわいい幼女がおっさんになるだと……。それはなんとし
ても避けなければ。

俺は真剣な顔で神様の顔をみる。

「……………よし、やっと話が出来そうね。とりあえずいいませんでした！」

神様が土下座をしてきた。しかも顔をこすりつけて、

「神様顔を上げて下さい。そんな綺麗な顔を擦りつけてはいけません！傷でも付いたら
どうするんですか！その前に何で俺に謝ってるんですか!？」

「ほんとに貴方を相手にすると疲れます。……………それで私が貴方に謝った理由は間

「違つて貴方を殺してしまつたからです。」

神様が申し訳無さそうにそう言ってくる。

そのシユンつとした顔もかわいいな。

はっ、こんなこと考えたと神様がおっさんになつてしまふ！真面目にしないと。

「間違つて殺した？」

よし！真面目な対応が出来た。これで神様がおっさんになる心配は消えた！

「それも聞こえてるけどね。」

「……………なん……………だと……………」

しまった。神様は俺の考えている事が分かるとういうのを忘れていた。ちくしよー！これで神様がおっさんになつてしまふ。

よし、死のう！こんな幼女が見られただけでも本望だ。

我が人生に一遍の悔いなし！

そして俺は徐ろに自分を首を締める。てか、一回死んでるのに死ねるのかな？ どうな
んだらう？

「もうわかったから！ おっさんにならないから話をさせて！」

「貴方は神様ですか？」

目の前の幼女から後光が見える。まるで神様みたいあ、神様だったね。

「やっぱりお前死んでみる？」

「神様やだなく。もう巫山戯ないからそんなドスの効いた声出さないで下さいよ。」

神様が強面のおっさんに負けなくらいのドスの効いた声だった。神様を怒らせると
怖いね。注意しないと。

「それでさっきの続きだけど、本当は貴方を殺した奴を殺すつもりだったけど、手がすべちゃって貴方を殺してしまったの。」

「大丈夫ですよ。俺は怒ってませんし、誰にだってミスはあります。それに死んだ事で神様にも会えましたしね！」

／／／／／

神様が照れてる。もうかわいいな♡

「兎に角！貴方には転生してもらいます！」

「転生？あの二次小説でよくある転生かな？」

「そう。その転生！」

もう心を読まれても驚かなぞ。俺は日々進化しているからね。それはいいとして転

生か。もしかして、

「神様！もしかして、願い事を3つ叶えてくれるとかはありますか？」

「うん。そのつもりだけど。」

よし、ここまでテンプレ通り。さてさて3つの願いか。何にしよう？
.....よし、これにしよう！

「神様3つの願い事決まりました。」

「どんな願い事？」

「まず1つ目はfortissimoに出てくる芳乃零二が持っている能力『復元する世界』つてできますか？」

「わかった。やるよ。二つ目は？」

「俺の魔力を無限にして欲しいんです。」

「わかった。それで3つ目？」

「3つ目は……………いつでもここに来れるようにして欲しいんです。」

「え？」

神様が何を言ってるかわからないような顔をしている。

これは説明が必要ですかな(▽▽?) ニヤリッ

「俺は神様にいつでも会えるようにして欲しいんですよ。」

「……………なんでそんな願いなの? もっといい願い事あるでしょ! 不死身とか不老不死とか!」

「神様。テンパリすぎてその二つ殆ど意味一緒だからね。そんなお茶目な神様もかわいいよ(・ω・) bグツ！」

「なんでそんな事が言えるのよ！」

なんでそんな事が言えるかって？それは、

「それは、俺が神様の事が好きだからに決まってるじゃないですか！」

「っ！」

「俺は好きじゃない相手にここまで言いませんよ。それに3つ目の願いは神様が好きだからいつも会いに行くために必要なんです。大好きな人と一緒に居れないのは寂しいじゃないですか。」

「それは……………」

「だから俺は3つ目の願いは絶対変えません。」

「……………わかった。3つ目の願いも叶えるよ。」

よかった。もし断られたでしょうとかハラハラしていたよ。俺は神様の方を見ると神様の顔が赤いどうしたのかな？

「神様顔が赤いけど大丈夫ですか？」

「……………大丈夫だから。」

そう言って背中を向ける。もしかして！

「神様！」

俺は一瞬で神様の前に行き、

「神様熱でもあるんですか？無理せず休んで下さい！俺は適当に転生しとくんぞ！」

「熱じゃないから、離れて！顔が近い！」

そう言っているがますます顔が赤くなつて行く。これは熱どころでは無い！何かの病気なのか？俺は病気には詳しくないがこれはやばい早く医者を見つけ無ければ！

「スタッフフー！スタッフフー！」

「貴方は何を言ってるの？」

神様が呆れた顔で言ってくる。

「え？ここにスタッフ居ないの？」

「なんでスタッフが居ると思つた！」

「こんなかわいい子が一人で居るはずないじゃないですか！どこかにプロデューサーが居るのが当たり前でしょ！」

「もうかわいい、かわいい言うな！」

「それは出来ない！」

「なんでよ！」

「言わないと俺が死んでしまう！」

「もう死んでしまえ！」

神様が渾身の突っ込みが入る。よし、これだけ元気だったらもう大丈夫だろう。俺は神様から離れる。

「それじゃあ貴方に行ってもらおう世界はハイスクールD×Dの世界よ。」

ハイスクールD×Dの世界か。確かあれは小説だったよな。友達がパワーインフレが凄いつて言つてたけど読んで無いから知らないんだよね。

まあ『復元する世界』があれば余裕だけどね（笑）

「わかりました。」

「それじゃああそこの扉の向こう側がハイスクールD×Dの世界と繋がっているからあそこから入つてね。」

そう言つて神様が指を指す。俺は指の指す方を向くとさっきのまでは無かつた黒い扉があつた。

「わかりました。あそこから入ればいいんですね。」

そう言つて俺は扉がある方へと歩き出す。

すると後ろから走ってくる。音が聞こえ振り向くと、

「んっ!？」

神様の顔が間近にあった。俺はびつくりして声をあげようとしたが声が出なかった。唇が塞がれていたからだ。もちろん神様の唇で。俺は頭が真っ白になってしまった。前の人生は人と付き合った事が無い俺はキスなんて初めてだ。それが今はどうだ!こんなかわいいうつらとキスなんて出来てしまった。これって絵柄的に犯罪臭がする。幼女を誘拐して無理矢理キスしてるって見られても可笑しくないんじゃないか? だか大丈夫だ! 神様からキスしてきたんだもん。俺は無罪だ! ああキスってこんな甘いものなんだな。

「……………ぷはっ。」

俺達は数秒間キスをしたただけだったが物凄い時間がたったような気がする。

「……………神様?」

「……そ、その……私からのプレゼント。……これかもここに来てくれる？……」

神様もじもじしながらそんなことを聞いてくる。

な、なんだなこのかわいい生物わ？こんなかわいい生物他に居るのだろうか？否、断じて否！居るはずが無い！居たら俺がお持ち帰りをする。浮気じゃないよ。俺はハーレムを作ろうとしてるだけだから！もうそのままハイスクールD×Dの中に連れ込んじゃおうかな！

「勿論来るよ。大好きな神様！」

それがそう言うのと神様だ俯いて何かぶつぶつ言っている。

「……し……なた……好き……」。

「神様なんて言った？」

「……私も……貴方が……好きよって言ったのよ！」

まさかあの神様がデレた。しかもあんなに顔を赤くしてかわいいな！これは男として一発言つとかないな！見とけよお前ら！これが男気だ！

「俺も好きだよ。よかつた俺と付き合ってくれませんか？」

おいほらそこ！さっきまで結婚結婚言つてた奴がへたれて付き合うつて言つてるよ
m9（＾皿＾）プギヤー!!とか言うな！

やっぱり愛のある結婚をしなくちやね！そうじゃないとすぐ離婚しちゃうからね！だから始めは付き合うから始めないとね。決してへたれた訳じゃない。ホントダカラネ。

「……………はい。」

そして俺達は引き合うようにまたキスをする。

今度は十秒くらいだったが一時間に感じられた。

彼女ができるつて最高—————！！

「それじゃあ行くね。」

そう言つて俺は扉に向かう。そしてふと思う。

「そう言えば神様の名前つてどんな名前なの？」

そう。俺は神様の名前を知らないのだ！これは由々しき事態である。彼女の名前を知らない彼氏が居てたまるか！

「私には名前がないの。よかつたら名前付けてくれる？」

「じゃあ雪で！」

「……………ゆき？」

「そう。その真つ白な肌とその真つ白な髪まるで雪みたいだったからそういう名前にし

たんだよ。気にいらない？」

「ううん。凄く嬉しい。………雪。私は雪。」

雪は凄く嬉しそうに自分の名前を呼んでいる。気に入って貰ってよかった。さておきそれじゃ俺の名前を教えてあげようかね。多分知ってると思うけど。

「雪。俺は黒羽隼人。これからよろしくね。」

「うん。これからよろしくね隼人。」

雪が満面の笑みでこっちに笑顔を見せてくる。

ああかわいい！こんなかわいい子が俺の彼女なんて夢みたいだ。もう死んでもいいや。

「ダメよ！絶対死んじゃダメだからね！」

雪が涙目になりながら抱きついて来た。こんな子にそこまで言われたら死ねないな。何が何でも生きなくてわ！

「大丈夫だよ。雪を置いて俺は死なないから。」

「本当？約束よ！」

「うん。約束。」

そして俺達は指切りをする。神様も指切りするんだ。

「指切りげんまん嘘ついたらハリセンボン飲ゝます。指切った！」

ハリセンボン？針千本じゃなくてあのハリセンボン？あんなの飲めねよ！てか口にはいねーよ！

俺が珍しく突っ込みをする。

「クスクスクス。」

雪は楽しように笑っている。ああ幸せだなあ！

俺は今度こそ扉の前まで行き、もう一度雪の方を見る。

雪は寂しそうにこつちを見ている。クッソ！そんな顔で見られたら行けないじゃないかな
いか！俺は雪に、

「大丈夫。すぐ会いに行くから！それまで待ってて。」

「うん。待ってるから！」

うん。これでよし！

雪が笑顔になった事を確認して俺は扉の向こう側に行く。

これから起きることにワクワクしながら。

二天龍、別に倒しても構わないのだろう？

俺が目を開けるとそこは森だった。周りを見るがただ森が広がっているだけ。

「やけに暗いな！」

そう思い上を見上げるとそこは紫の空があった。紫？

はっ！まさか世界が滅んだというのか？世界が核戦争をした。地球の末路か！こうしてはおれん、一刻も早く世界を救わなくてわ！

『なんでいつつも隼人はそうなんですか？ポケ倒さないといけないんですか？』

「当たり前だ！俺からポケを取ったらロリコンしか残らんぞ！」

『ロリコンでも充分インパクトはありますよ。』

「そうかな？ロリコンは世界共通だからインパクトは無いだろ。」

『ロリコンは世界共通ではありません！ロリコンは変わった性癖ですよ！』

「そんな馬鹿な……………。つでここどこ？」

『あなたって人わ。ここは冥界悪魔や墮天使がいる世界です。』

「なんほど、それであれば何？」

俺が指を指す方にはでかいドラゴンが2匹とそれに群がる人がいた。

『あれ？ちよつと待って下さい……………。』

「雪どうした？」

『すいません。送る時間軸を間違えました。』

「また間違えたの？そんなお茶目な雪がかわいいよ♡」

『／／／／／……ありがとうございます……。』

雪がデれた。雪がデれると段々と声が小さくなつていくのがすごいかわいい！はあもう会いたくなつて来た。もうあつちに住んじゃおうかな♪

「それで俺はどうしたらいいの？ここに住めばいいの？ここに雪との愛の巣を作ればいいの？もう子供つくっちゃおう？」

『もう隼人は何を言ってるのよ！……その……まだ……子供は……早いかな？……嫌じゃ……ないけど……／／／／／』

グハッ!?なんて威力だ！まさか俺のハートダイレクトアタックを仕掛けてくるだど!?もうやめて、もう俺は雪にメロメロよ！しかも嫌じゃないという事は………少

ししたらOKと言う事だ！よし、これで勝つる！

生きてて良かったあああああ！雪愛してらううううう！

「うん。それじゃあお互いの理解が深まったらしようね。」

『……………うん。……………／／／／／』

やっぱり雪は俺を殺しにかかってきている。そんな反応されたら俺、萌え死んじやうじゃないか。萌えつきちやう！

『……………話を戻すわね。本来送るはずだった時間軸にもう一度転移させるから。それだね、転移するのに後1日必要なの。それまで待つてもらえる？』

「雪のお願いだ！それぐらいお安い御用だ！」

『ありがとう♪それじゃあ準備をするから1日会えないけど待つてね……………。転移させ
た後……………そ、その……………褒美上げるから。』

「雪と会えないのは悲しいが待つてるよ。雪も頑張つてね。」

『うん！私頑張るから待つててね♪』

そうやって雪の声が聞こえなくなった。

はあ雪ってかわいいな。最後のあなたの為に頑張るねって言うてくれた時は死にかけた。え？そんな事言つてないって？近いこと言つてたからいいんだよ！

さて暇になってしまった。どうしよう？やる事なんてないしなく………あつ！有るじゃないか。この能力を使えば暇つぶし出来るのでは？よし、そうしよう！相手はあ………あのドラゴンだ！よし、行こう。思い立ったが吉日だ！

そして俺は二天龍をボコリに行ったのだ。

そして今そのドラゴンの前に浮いています。なんで浮いてるかって？大人の事情だよ！そんな事より今はドラゴンだ、巫山戯てる時間は無いんだ！後にしてくれ。

「貴様、人間か。人間がなぜこんなところにいる。」

「死にたくなければここから立ち去れ！人間風情が私とドライグの争いを邪魔するのであれば貴様を殺す。」

なんか赤いドラゴンと白いドラゴンがいきがっている。俺こういう奴嫌いなんだよね。自分が強いからって威張り散らしている奴。これはお灸をすえてやらないと。

「じゃあかかって来いよ赤トカゲ、白いトカゲ！」

「貴様あああああああ!!」

お？怒ったみたいだ。なんだよだいぶ沸点低いじゃないか。それぐらいで怒るなよ。小学生かよ！

赤トカゲと白トカゲの口には、今にも放たんとしているエネルギーがあつた。さて俺も最強の魔法使いの能力を全開に使いますかね。

「死ねええええええええええええ！」

赤と白からビームが放たれるが俺は全く動かなかった。だってそんなの怖くないもん！だって俺には絶対防御の魔法があるから。

「『復元する世界 術式固定』へダ・カーポ アイનハルト」

俺そう叫び。赤と白のビームを受ける。

「フハハハたわない。」

「やはり人間の戯言気にする事でもなかったか。」

「おーい。俺は無傷だけどう？」

「!!!!!!!!!!!!!!」

俺が爆炎の中から無傷で出てくると、赤と白の他に周りの人達も驚いていた。なんでだろう？まあといあえず、

「ねえねえ。自分達が倒したと思った相手が無傷だったって知った時どんな気持ちだった？ねえねえ今どんな気持ち？ねえねえ今はどんな気持ち？m9（＾皿＾）プギャー!!」

「貴様なぜあの攻撃から生き延びれた！」

「たかが人間如きが防げる攻撃ではないはず。」

「知りたい？でも教える馬鹿が居ると思う？でも俺は教えちゃう！」

「やっぱり教えんていい！」

まさか赤と白に突っ込まれるとはこ奴らなかなかやるな。だがそれを無視して言おうじゃないか！

「まあそう言わずに聞いてよ。……………ねえ今は期待した？もしかしたら本当に教えてくれると思っただ？そんな訳無いじゃん。ねえねえ今どんな気持ち？NDKNDK」

「貴様は許さん！」

そう言つて赤と白がこっちに向かつて来る。さて、『復元する世界 術式固定』の確認は済んだし、こいつらはもういいか。そろそろ終わらせてあげよう。これ以上弄ったら相手のSAN値が下がっちゃうからね。うん。俺って優しい♪

赤と白がその鋭い鍵爪で俺を引き裂こうと腕を振り下ろすが届かない。

「何？」

赤と白がもう一度腕を振るが又しても当たらない。

「何が起こってるんだ？」

赤と白が何が起こってるのかわからないのかただ我武者羅に腕を振る。なぜこんな事になっているのかと言うと、俺の能力『復元する世界』を発動しているからだ。この能力はくあらゆる現象を過去の状態に復元するく能力。この能力を使って赤と白の腕がギリギリ届かないとこまで移動させてるからだ。それを知らずに赤と白が腕を振る。まるでおやつが取れない犬のようだった。

「なんで届かないんだ！」

「さて、もうお前ら飽きたから、もう倒れていいよ。」

そうやって俺は魔力を右手に溜めて行く。

「なんだその魔力？人間がそんな魔力を持っている筈がない！」

「現実見ろよ。現に俺が存在しているぞ。」

「クソオオオオオ！」

「ぶっ飛びやがれ！」

『神討つ拳狼の蒼槍』へフェンリスヴォルフ

そう言つて俺は赤と白を巻き込む魔力パンチを喰らわす。

まるで核が落ちたようなきこの雲が立ちのぼる。爆心地には瀕死の状態の赤と白がいた。あれを喰らつたらもう動けないだろう！なんせ俺の魔力無限、インフィニティなのだ！だから俺の力もインフィニティだぜ！そんなことを考えていると、蝙蝠の羽を生やした赤髪の男が俺に近寄つて来る。

「……………君は何者だい？見たところ人間だけど？」

「……………。」

やばい変なイケメンに絡まれた。俺は今はお金持って無いんです。なんなら飛び跳ねましようか？それで証明できます。えっと俺が何者だっけどうしよう？本名を名乗る訳にはいけない。だが颯爽登場したからにはカツコつけなくては、

「俺はただの魔法使いですよ。」

「……魔法使い？」

やってしまった。これでは俺が中二病の痛い奴だっけ思われてしまう。てかもう手遅れだ。赤髪のイケメンが引いてる。多分このイケメン（こいつこんな年にもなっただ中二病発症中かよm9（ㄟㄟ）プギヤー!!）とか思ってるよ絶対！いかん、ここにいたらまたぼろを出しかねない。ここはc o o ーに去らねば。あの人の様に、

「それじゃ俺はc o o ーに去るぜ〜！」

よし、決まった。これは本家を抜いたはずだ！これからは俺の時代だ！

「……ちよつと待つて」

ガシツ。

え？なんで腕掴むの？そこはc o o r に去れさせてよ。これじや本家を抜くどころか本家の人にm9（ハハ）プギヤー!!されるよ。やめてこれ以上俺は中二病をさらけ出したくないんだよ！

「放してください。」

「お礼がしたいんだ。良かったら来てくれないかな?」

そんな甘い言葉に乗る俺じゃないわ。もし俺に俺がしたいっていうなら、雪以上の幼女を連れて来いよ！

そう思っていると後ろから声をかけられる。

「…見つけた。」

俺は、次は誰だ？と思いい後ろを見ると黒髪のごスロリの少女がいた。

「……………我、お前がほしい。」

「ああ俺もだよ。俺も君がほしい。」

俺は赤髪イケメンの前から一瞬でゴスロリ少女の前に行く。これは雪以上かもしれない。こんなかわいい子がこの世界に居るなんてこの世界最高！にしても、このゴスロリはけしからん！前が殆ど全開じゃないか！胸もバツテンのシールを貼っただけだし、これはいかん！こんなハレンチな格好は俺の前でしか許さない！ああかわいい。雪は表情がコロコロってかわいいがこの子は無表情で無口な子だね。だがそれがまたいい！これだからロリコンはやめられないぜ！ロリコン最高!!!

「っ！オーフィス！」

そう言つて赤髪イケメンが攻撃しようとしたが、

「てめえ死にたのか？」

それを俺が許す訳が無い！俺が全力の殺気と魔力を出したら怯えてしまった。まあ攻撃しなかっただけでもよしとするか。もし攻撃してこんなかわいい子に傷でも負わしたらここにいる全員を殺すところだった。

にしてもかわいいな♪もうお持ち帰りしたい。

「君はかわいいね。ちょっとあっちでいいことしよ？」

「……………ん。」

俺が犯罪者のセリフを吐いたのにも関わらず着いて来てくれるだつて!?!これはお持ち帰りOKって合図だよな？あつちで安安ことやこんなことしてもいいんだよね？

おつとここでR18の展開を考えた奴は心が汚いぞ。それをするのはもつと後だ。それまで自分達の妄想でなんとかしろ！

「さて、じゃあ行こうか♪」

「……………ん。」

そうやって彼女を担ぎ、音速で元いた場所に戻る。
ああ早くこの子をprprしたいな。

??? side

「……………さっきのはなんだったのか？」

二天龍を倒したかと思っただらまさかオーフィスが現れて何処かに行ってしまった。訳がわからない。彼はなんだったのか？そもそもなんで人間がこんな所に？ますます謎が深まっていく。

「サーゼクス大丈夫だったか？」

「アジユカか。僕は大丈夫だよ。」

「それにしてもあの人間何者だった？」

「わからない。でも魔法使いとは言っていたよ。」

「魔法使い？」

「ああ。けどあんな魔法見たことない。」

「……………今はそんな事は後回しだ。まず、あの赤龍帝と白龍皇の封印が先だ。」

「わかった。今行くよ。」

サーゼクスは仲間たちの方に向かう。

(彼とはまた会えそうな気がする。その時、何者か聞かなくては。)

そう思い封印の手伝いをする。

そしてサーゼクスはあの魔法使いの事を

『最強の魔法使い・ウィザード』と命名し、

聖書に名前を残したのだ。

隼人がこれを知るのは千年後だった。

これは健全な恋愛です。ホントだよ

俺は今元いた森にいる。ゴスロリ幼女を抱えて……………あれ？これって誘拐？もしかして俺って遂に犯罪者になってしまった？それはまずい返して来ないと。だが返したくない。もう俺責任とってこの子を幸せにしないと！

そんな事を考えていると、無言で服の端を引っ張るゴスロリ幼女。何このかわいい仕事草死んでしまう。

「どうしたの？」

「……………我とグレートレットを倒して。」

「グレートレットって何？」

「グレートレットは次元の狭間いるドラゴン。我、次元の狭間に戻りたい。」

「帰れないの？」

「グレートレットが今いるから。」

「よし、倒そうか！君みたいなかわいい子を追い出すドラゴンなんて殺してしまおう！てか生きてる事が苦痛な事をしよう！それより君ほんとかわいいね♪そういえばお母さんとお父さん？ご挨拶行かないといけないから。」

「……………ずっと我、一人。」

「それってもう御家族はいないってこと？……………ごめん俺知らなくて。」

「違う。我産まれた時からずっと一人。もう千年以上生きてる。」

「千年以上も!？」

「…ん。我、ドラゴンだから。」

ドラゴンってそんな生きるのか？ていうか、こんなかわいい子がドラゴンだった？もしかしてドラゴンってみんなロリなのか？けどさつき倒したドラゴンはおっさんの声だったし、この子だけなのか？まあいい。でも、

「1人なんだよね？次元の狭間に帰っても寂しくない？」

「私の帰るところ、次元の狭間だけ。」

帰る場所がそこしかなくて帰ったとしても独りぼっちじゃ可哀そうだろ！こんなかわい子が独りぼっちだなんて俺が許さん！これはロリコンとしては無く一人の間人として言っているんだ。分かってくれ！

「じゃあ俺が君の帰る場所になるよ！」

「……………？」

首をカクンと傾けて、頭に？マークが出ているような格好をしてくる。この子何者だ！俺のドツボに入る仕事をポンポンと繰り出してくるんだ？もう俺の好感度MAXまでいちゃってるよ？もうちよつとで天元突破しちやつてメーター振り切れちやうよ？いいの？もう襲っちゃうぞ！

「つまりね。次元の狭間に戻るより、俺といた方が面白いと思うよ。俺も君と一緒にいたいしね。」

「……お前といったら楽しい？」

「勿論！一人でいたら出来ないことも沢山してあげるよ！グフフフフ……」

「……ん。我、お前という。」

「ありがとう。俺は黒羽隼人って言うんだ。君はなんて言うの？」

「我、オフィス。」

「オーフィスちゃんかかわいい名前だね。」

「我、かわいい？」

「当たり前だよ！もうキスしたいくらいかわいいよ！」

「隼人は我とキスしたいの？」

「勿論！あわよくばそれ以上の事も…っ!？」

俺はびつくりした。オーフィスが俺にキスしてきた。そつと触れるキスだった。………どうしてこうなった？

「な、な、なんでいきなりキスしてくるんだ！気持ちよかったじゃないか！ご馳走様です。」

「……？隼人、我とキスしたいって言った。」

「言っただけど不意打ちは駄目だ！俺の理性が壊れてしまう！だからもう一回キスをしよう！もう少しで理性が壊れそうなんだ！この勢いのまま逝かせてくれ！」

「うん。」

そして俺達はまたキスをする。

バキッ！↑理性が壊れる音

「オーフィスー！！」

「んあつ……………ああ……………」

ピンポンパンポンー。只今、R15の規制を超える行為をしているため、しばらくお待ち下さい。皆様には多大なる迷惑をおかけしました事を心よりお詫び申し上げます。

「すまないオフィス。責任は取る。」

「ん。大丈夫。私も気持ちよかったから。」

「もうかわいいな♪」

俺はオフィスを抱き締める。オフィスも満更でなないらしくおとなしく抱かれている。やばいまたムラムラしてきた。もう一回戦やつとくか？俺はオフィスともう一回やろうとすると、

「お前は何をしてんじゃあああ！」

頭に凄い衝撃がはしる。振り向くとそこには目一杯に涙を溜まらせた雪がいた。やばいこの状況はやばい。付き合う宣言したすぐ後にもう浮気してんだもん。しかもヤちゃったんだもん。これは殺される。

「ゆ、雪これは違うんだ！」

「何が違うって言うのっ！」

「そ、それは……………」。

「私のことなんて本当はどうでも良かったんでしょ！私よりその子可愛いもんね。私の私よりその子の方が……………うう……………グスッ。」

遂には雪が泣き出してしまった。

俺は慌てて雪の方へ走る。

「ごめん雪。そんなつもりじゃなかったんだ。」

「さつきから言い訳ばっかじゃん！こんなんじゃない一人だけはしゃいでた私が馬鹿みたいじゃない！」

「ごめん。でも、俺は雪が1番好きなんだ！信じてくれ！」

「だったらあたしだけを見てよ！他の子なんて見ないで！」

雪が泣きながら訴えてくる。俺の事をそんなにも思ってくれていたなんて思いもしなかった。だが俺にはロリハーレムを作るっていう夢がある。そこだけは譲れない。

「ごめん雪、それは出来ない。」

「っ!？」

「俺はハーレムを作るっていう夢がある。でも、これだけは覚えてほしい。俺はどれだけ好きな人を作っても、1番好きなのは雪だ！どんな事があろうと雪が1番好きだ！」

「そんなの信じられる訳ないじゃない！」

「どうしたら信じてくれる？」

「そ、それは……………」

「俺は雪に信じてもらえるならなんだってする。」

「…………じゃ、じゃあ……………あの子にした事よりもっと凄い事してよ……………
／／／／／

「え!？」

え? どういうこと? え? まさか雪が俺の事を誘っているのか? しかもあんなに顔を赤くして。よっぽど恥ずかしいかったんだね。かわいいな。愛おしいな。やっぱ一番は雪だ。俺に新しい命をくれて、俺の彼女になってくれて、心から思うよ。

「わかったよ。雪、愛してる。」

「隼人……………ん……………」

ピンポンパンポンー！またしてもR18的な行為が行われているため、しばらくお待ち下さい。重ね重ね皆様には多大なるご迷惑をかけしまい申しわけありません。心よりお詫び申し上げます。

「今日はもう無理だわ！もう出ない。」

「……………はあ…はあ…はあ…。」

「雪大丈夫？」

「……………はあ…はあ…うん。……………大丈夫…。」

雪もこれ以上動けないようだ。まああれだけしたら、誰だつて動けなくなるわ。それより、

「それより雪、なんでこの世界に居るんだ？神様の仕事は？」

「辞めちゃった。」

「辞めたって。どうして？」

「そ、それは隼人と一緒に居たかったから……………」。

まさか俺と一緒に居るために神様の仕事を辞めてまで来てくれたのか？もう言葉にならない。俺泣きそうだよ。雪を好きになって本当に良かった。絶対幸せにする。もう絶対離さない。

「ありがとう雪！やっぱり雪が一番かわいいよ！」

「……………ありがとう……………」

そんなに顔赤くして本当にかわいいな雪は！世界でいや、歴史上で一番かわいい！

「隼人、我は？」

オーフィスが気になったのか聞いてくる。

さつきまで寝てたのになんで話の内容知ってるん？

そんなの答えは決まっているだろう！

「オーフィスも勿論かわいいよ♪」

俺はオーフィスの頭を撫でながら言う。

「……………ん。」

撫でるのが気持ちいいのか、目を細めている。こころなしか、顔も赤い。

「じ……………ん。」

雪が羨ましそうにこっちを見てくる。ヤキモチを妬いているのか。かわいいな雪も。俺は雪にこっちに来てと合図をして、雪の頭も撫でる。

「えへへへへ。」

雪が嬉しそうにしている。それだけで俺は幸せになれる。両手に花状態だ。いや、両手に幼女だ！なんだこの響きは？すごく、犯罪臭がする。まあそれは置いておこう。とりあえずこれからの事について雪と話し合わねば。

「それで雪、転送の準備できた？」

「あ！忘れてた。大丈夫、もう転送できるよ。」

「それはよかった。それでね、お願いがあるんだけど。」

「お願い？」

「オフィスも連れて行けない？」

俺はオフィスを抱っこして言う。まるで人形みたいに、無表情で動かない。これは

本当は人形じゃないか？と疑ってしまふ雪だった。

「できるけどなんで？」

「この子帰る場所がないんだよ！だから俺はこの子居場所になるって決めたんだ。この子を一人置いて行けない！だから頼む。」

「やけにその子に拘わるわね。やっぱりその子の方が！」

「俺は雪が1番だよ！確かにオーフィスも好きだけどそれより雪の方が好きだよ。なんなら転送した後にもまたする？」

「……………わかった。……………その……………転送後は……………お願いします……………」

「任せろ（・ω・）bグツ！」

「我也したい。」

「じゃあオフィスも一緒にしようか。」

「うん。」

「やっぱりそのk『雪が1番だよ！愛してる』えへへへ〜」

なんか雪がちよろい。だがそこがかわいい！転送された後、むちやくちやにしてあげるね♪もちろんオフィスも♪

「それじゃ転送するね。」

雪がそう言った直後俺達は淡い光に包まれる。

その光が段々と強くなり、眩しくなって目を瞑った時俺達は100年後に転送された。

目を開けるとそこは家の中だった。しかも結構広い。

「此処は？」

「ここは私達の家よー！」

雪がドヤ顔で胸を張っている。そんなところは見かけ道理なんだね。それよりこの家は防音対策はしてるのだろうか？俺達の夜の営みが他の人に聞こえてはいけない！てか、聞かす訳にはいかない！聞いていいのは俺だけだ！

「雪、この家って防音対策ってしてる？」

「え？なんで？」

「そりゃあ、雪と『自主規制』したり、『放送禁止用語』したりした時声が外に漏れたら大変じゃないか!!」

「もうそんなこと大声で言わないで!」

「これからするから気になって仕方が無いんだよ!」

「大丈夫だからしてるから、そんな恥ずかしい事言わないで!」

やっぱり恥ずかしかつてる雪もかわいいな♡もう我慢ならん!.....そう
言えばオフィスはどこ行った?見当たらないけど?

「雪、オフィスがどこ行ったか知らない?」

「あの子なら、二階に行きましたけど。」

「そっか。それより雪。オフィスの事をあの子って言うじゃなくて名前呼びなさい

「これから家族になるんだから！」

「けどあの子は私の恋敵です。気を許す訳にはいかないんです！」

「でもこれからは家族なんだし名前で動かない！それに言ったら。俺は雪が1番って。結婚するなら真っ先に雪の所に行くよ。」

「隼人……………」

「だからオフィスの事名前は呼んであげて。」

「うん。」

「うん！そんないい子には飛び切りの事をしてあげないと♪」

「それって……………もしかして。」

「考えてる通りだと思うよ。雪も日になって来たね。俺は嬉しいよ♪」

「もう隼人！」

「ごめんごめん。それじゃオフィスを探しに行くか。」

「オフィスを？」

「そう！」

「なんで？」

「それは後でのお楽しみで♪」

そう言って雪の手を引っ張って二階に行く。

「ちよつと待ってよ！」

雪は俺に引つ張られる用についてくる。手を握って。

はあ雪の手ちよう柔らけえ。ずっと握っていたい。

俺達は二階へ到着した。これまた広い。部屋も6個ある。俺は部屋の多さ驚いているとどこからか声が聞こえてくる。どこからだろう？そう思い俺は音のする方へ歩き出す。雪も聞こえたのか、俺と一緒に歩き出す。音へ近くいっていると、

「……………んっ……………んあ……………くっ……………」

そんな声が聞こえてくる。俺は耳を疑った。この声は間違いなくオフィスの声。だが、聞こえてくるのは、すごく色っぽい声が聞こえてくる。聞こえてくる場所は二階の一番奥の部屋からだった。雪も聞こえたのか顔を赤くしている。俺達は部屋の扉を少し開けて中の様子を見るとそこには、

「……………んっ…あん……………んはっ……………はあはあ……………んあ……………」

○ナニーをしているオフィスの姿があるじゃないですか奥様！たぶん俺達の『自主

規制』を見て、オフィスも熱くなってしまったのだろう。雪も顔を真っ赤にさせて見ている。これはなかなか見れない光景だ！すっかり目に焼き付けておかねば！俺は目を録画モードにしてオフィスのオ○ニーを見る。しかし、なんて子なんだ。あんな物事を知らなさそうな顔をしながらとんでもないこと知ってるとは。俺嬉しい♡俺はHな子も好きだよ！

「隼人今、変なこと考えなかった？」

雪がジト目でこつちを見てくる。馬鹿な。もう神様じゃないのになぜ俺の心の声がわかる？

「隼人はすぐ顔に出るから。」

またしても読まれてしまった。俺ってそんな顔に出てるかな？正直自覚はないんだけど。

「…さつきから何してるの？」

俺達はビクツと飛び跳ねて声のする方を向くとさつきまでオナ○ーをしていたオ
フィスがたっていた。しかも途中だったのか服は着崩れているし、またからは『NG
ワード』が垂れている。すごくエロいです。

「いや〜オオフィスがどこにいるかなって探していたんだよな雪!」

「う、うん。そう探していたの。」

俺達は苦し紛れの嘘をつくが、

「嘘。さつきから我のことずっと見てた。」

あつさりとバレてしまう。それにしても気づいててオナニ○していたのか!? なかな
かの強者だな。もう襲いたいよ! けど先に雪を襲わないと。すると、服の裾をくいくい
引つ張られる。振り向くと雪が俯いた状態で俺の服を掴んでいた。

「……………は、隼人。……………私、もう我慢出来ない。」

雪が俯いたままそんなことを言う。その時俺は気付いた。気付いてしまった。雪の股から『NGワード』が垂れていた事に！俺は息を呑む。

「雪……………」

「お願い……………シて……………」

バキツ↑再度理性が壊れる音

「雪、愛してるううううううう！」

「キャツ……………隼人がつつき過ぎ……………あん！」

ピンポンパンポンー！作者を殴って来るので少しお待ち下さい。

「なんだお前は？」

「読者様を代表して殴りに来ました。」

「なんで殴られないといけないんだよ！」

「それは読者様にあんだけ今からやるよ雰囲気作っておいて内容は全カットってどういう事ですか？」

「そんなの自分で妄想しろよ！」

「そう言うと思ったから殴りに来たんです。」

「やめろこっちに来るなー！ー！ギヤアアアアアっ!!」

大変お待たせしてしまつて大変申し訳ありませんでした。作者との話し合い（物理）の結果明日中にはR18版を出すことに決定致しました。本当に読者の皆様には多大なるご迷惑をおかけしましたし事を心よりお詫び申し上げます。

「さて、雪今は原作で言うところへんなんだ？」

「原作が始まる一日前よ。隼人は原作の主人公の友達で同じ学年よ。しかも隼人は『口リコン紳士』って言われて人気だから。」

「それって違う意味で人気なんじゃないの？」

「そうでもないよ。ロリコンだけど、優しいくて、いつでも相談に乗ってあげる人って事にしてあるから少なくとも嫌われてないよ。」

「……………そうなんだ。」

本当に嫌われて無いかそれって？だって最初にロリコンが付いてるせいで嫌われるんじゃないのか？わからない！……………まあいつか！俺には雪とオフィスが居るし。寂しくなんてないし。本当だからな……………グスン。

「雪俺の膝の上に乗ってくれる？」

そう言うとき雪は恥ずかしがりなも、俺の膝の上に乗ってくる。俺は雪を思いつきり抱き締める。雪の顔がますます赤くなってる。めっちゃかわいい♡意地悪したくなってる。

俺はその後ちよつと悪戯を雪にしたら怒られてどこかに行ってしまった。

「さて、明日から原作入りか。どんなかわいい子に出会えるかな？楽しみだ。」

俺はまだ見ぬロリっ子達に思いをはせながらオフィスを抱きつくのだった。オフィスかわいいprpr。

旧校舎のディアボロス

新たなロリっ子発見じやあ！

さて俺は今駒王学園に向かっているのだが、どこにあるかわからない。よく転生ものじや、主人公は何故か知っていて普通に登校出来るのになんで俺は着けないだよ！てか、駒王学園の生徒を見かけない。なんでなんだ？俺、駒王学園の生徒の後を付けて学園に行くつもりだったのにこれじやあどうしようもねーじゃん！雪ぐ。なんで俺にその設定の記憶付けてくれなかったんだ。『ごめん忘れてた♪』ってかわいく言ったから許してあげるけど、雪ってドジっ子なのかな？だがそれもかわいい♡………ってこんな事してる場合じやなかった！何としても学園に行かなくては！ここは恥をしのんで人に聞こう！周りを見てみるが人がいない。まるで人祓いがされているみたいだった。

「なんで人がいねーんだ？」

すると向こうから、金髪ツインテールの少女が歩いてくる。

「ねえねえこれら俺と遊ばない?」

俺は走って少女の所まで行き、ナンパをする

「あんた誰っスか?」

「そんな事どうでもいいじゃないか! さあ俺と遊びに行こうよ! そして最後には一緒に愛を育もうじゃないか!」

「なんなんすかこいつ! 気持ち悪いつス!」

そんな引かなくても良いじゃないか! 俺はただ君が好きただけなのに、これじゃ駄目なら、

「お菓子買ってあげるから遊びに行こう。ね?」

「私を子供扱いするなっス!」

うくん。これくらいの子だったら普通はついて来る筈なのなんで？それじゃもつと上の物にしよう。

「俺の体を好きにしているから遊びに行こう！」

「お前は変態っスか！そんなもんお菓子より要らないっス！」

「そんな馬鹿な………………。orz」

オーフィスや雪なら、喜んでくれるのになんでこの子には喜んでくれないんだ？世の中は不思議でいっぱいだ！

「さて、お巫山戯はここまでにして聞きたい事があるんだがい？」

「さつきまでウチからかわれていたんスか！」

「そんな事は無いよ！俺は君が欲しいだ！出来ればずっといて欲しい。」

「こんなロマンの欠片もない告白は初めてっス！殺すっスよ！」

「ごめんごめん。だから殺さないで。まだ俺は君と付き合つて無いからね！それまで死ねないよ！」

「もうさつきからなんなんっスかこいつ！」

からかい過ぎてなんか涙目になつてきている。さて本当にここまでにして学園に行かなくては遅刻してしまう。教えてくれるかな？

「本当にごめん。それでちよつと聞きたいんだけど、駒王学園つてどう行けばいいかわかる？」

「ほんとムカつく人間っスね！駒王学園なら、ここを真つ直ぐ行つて、突き当たりを右に行つて、ケーキ屋の前を右に曲がったらあるっスよ！」

ムカつくと言つていたが親切に教えてくれた。もしかしてこれが所謂ツンデレなのか!? まあこれで助かった、

「ありがとう。助かったよ!」

「それじゃあさっさと行けっス!」

「それじゃあね。また会ったら何か奢るよ!」

「2度と会いたくないっス。」

「そんな事言わずにさ。」

「わかったから早く行けっス!」

俺はもう1度お礼を言い学校に向かう。そういえば、あの子の名前聞いて無いな。今

度あつたら聞いとこ。

「それで着いたのだが……俺のクラスどこ？」

いや、だつてそうだろ！今までの記憶が無いのにどうやって自分の教室に行くんだよ！無理ゲーだろ！雪お願いだから助けて。元神様だろ

『隼人どうしたの？』

「……………俺疲れてるのかな？頭の中から雪の音が聞こえる。雪が恋しくて遂にイかれたのか？」

『大丈夫よ、隼人はイかれてなんて無いよ。私が直接隼人の頭の中に話しかけているんだから。』

「そうだったのか。それで俺はどこのクラスに行けばいいんだ？生徒に聞くわけにもい
かないし。」

『ちよつと待つてて。隼人に関する設定を送るから。』

「送る？どうやって？」

『こつやつて。』

すると頭が痛くなりその場に蹲ってしまう。頭にすごい量の情報が流れ込んでくる。
やばい目眩がする。吐きそう。だが、すぐに頭痛は引き、頭に自分のクラス、交友関係、
その他諸々の情報が追加されていた。

『どう？ちゃんと出来た？』

「ああ大丈夫だよ！これで普通に振る舞える。」

『よかった。また失敗したらどうしようかと思った。』

「大丈夫。雪なら成功するって信じてたから。ちなみに失敗したらどんなになってたのかな？」

『ありがとう隼人。失敗してたら……………』

「雪続きは？」

『えくとね。落ち着いて聞いて欲しいんだけど、もし失敗してたら、隼人の記憶が全て壊れて廃人になってたかも。』

「ふあっ!？」

え?そんな危険な行為だったのあれ。よかった成功して。雪って結構ドジだから失敗してたかもしれない可能性があるから本当に成功してよかった。頼む雪。ドジっ子もかわいいがそんな危険な行為をドジっ子がしちゃ駄目だ!死人が出る!

『もしかして怒った？』

雪がシユンつとした声で言ってくる。ぐっそんなかわいい声出されたら怒れないじゃないか！まあ起こる気0なんだけどね！

「怒って無いよ。けど今度からはそんな危ないまねはしないでね。」

『うん。わかった。』

「よろしい！それと雪！」

『何？』

「俺に記憶をくれてありがとう。帰ったらいっぱい抱きしめてあげるよ！」

『……………うん……………よろしくお願いします……………』

もうかわいいな!今すぐ帰って抱きしめてあげたい。

「うん。それじゃあね雪。」

『じゃあね隼人。……………約束守ってよね……………』

「うん。絶対守るよ。」

そう言つて雪の音が聞こえなくなった。もうかわいいな雪わ。流石俺の彼女だわ。もう一生離さないからな!何があつても一緒にいてやる!

さて、教室に行きますか。俺の教室は確かこのクラスだったな。

「隼人君おはよう。」

「隼人おはよう。」

「ロリコンおはよう。」

「俺の彼氏が来たようだ。どうだ朝の挨拶で俺とヤ☆ラ☆ナ☆イ☆カ」

クラスみんなが挨拶をしてくる。いいクラスメイトだな。よし今日も一日頑張るか！え？突っ込まなのか？だって、言わないでくれ。俺もどう処理したらいいのかわからないんだ。

「おはようみんな。」

それだけ言って席に着く。横を向くと男子生徒3人がエロ談話をしている。こいつらは、ただの変態達だ。まず、イツセーはいつもおっぱいおっぱい言っているただのエロガキだ。ちなみに俺の友達だ。ただのエロガキなのだが根は優しいやつだ。次は、松田だ。こいつは女性の恥ずかしい写真を撮るのが好きな変態だ。『セクハラパパラチ』とも呼ばれている変態だ。もう一度言おう。こいつは変態だ。最後に元浜。先に言っておこう。こいつも変態だ。眼鏡を通して女性のスリーサイズを測る才能を持つ変態だ。『スリーサイズスカウター』とも言われている。そんな奴らだ。女子からは絶大なる不人気をもらっている。まあ日頃からおっぱいおっぱい言ってる奴と、恥ずかしい写真を撮る奴と、自分のスリーサイズを勝手に測る奴が人気が出るはずは無いな。お前も変態じゃないか！だって？確かにロリコンだが俺はこいつらはとは違って相手の

嫌がる事はしないんだ！だから、

「隼人君、この問題わからないんだけど教えてくれる？」

「うん。いいよ。どこがわからないの？」

「えつとね……………つてとこだけどわかる？」

「ああそこね。これはね……………つて事なんだよ。」

「ありがとう隼人君。」

「いえいえ。もしまたわからないとこがあつたら聞いてくれ。俺もわかる範囲で教えるから。」

／／／／／……………ありがとう。そうするね。」

そう言つて女の子が戻つて行つた。

見たかこれが俺の実力だ！決して女性のお願いは断らず、手伝える事はなんでも手伝う。このお陰で、俺は結構人気者だ。告白されたことも何度かある。まあ俺はロリコンだからほとんど振つたんだけどね。それに今俺には雪つていうかわいい彼女がいる。だからこれからも全て振るつもりだ。

「隼人〜」

イツセーが俺を恨めしそうにこつちを見てくる。

「なんで隼人はモテるんだよ！ロリコンなのに！」

「俺はお前らみたいに変態じゃないからな。それにお前らは顔はいいんだから、少しは黙つていればモテると思うぞ！」

「クソ〜！イケメンに言われても全然嬉しくねえ！」

「それに俺達はもう引き返せないところまで来てしまったんだ!もう突っ切るしかない!」

「隼人貴様俺達に喧嘩売ってんのか!」

「ほう、俺と喧嘩すると。なかなか威勢がいいんだな。」

バキバキボキッ

「すいませんでしたー!ー!」

「分かればいいんだよ。分かれば。」

「く、いつか見返してやる!」

「何か言ったか?」

「いえ、何も。」

そう言つて3人は自分の席に戻つて行つた。それからすぐにチャイムが鳴りHRが

始まった。

授業が終わり今は昼休みだ。俺は昼飯を食べに今屋上に向かっている。別に友達がないから屋上で食べる訳ではない。ただ、今日は屋上で食べたい気分なのだ！俺が屋上の扉を開けると白髪の小柄な女の子がいた。

「小猫ちゃん、今日もかわいいね。こんな所でどうしたの？」

「げ、黒羽先輩。」

「げ、とはひどい言い草だね」

この子は塔城小猫。一年生だ。学園のマスコットキャラクター的な存在だ。それくらいかわいくて人気もある。基本無口で無表情。なんかオーフィスとキャラが被ってるがオーフィスとは違ってまだ表情が読める。オーフィスは全然表情変わらないから読めないんだよね。

「先輩こそ何しに来たんですか？」

「昼ご飯をここで食べようかと思って。良かったら小猫ちゃんも一緒にどう？」

「いいえ、お断りs『お菓子あるけど』ご一緒にさせていただきます！」

ふふふ…小猫ちゃんが甘い物好きなのは知っているのだよ。なんで甘い物持つてるかって？それはロリコンだからだよ！ロリコンはお菓子というアイテムは必須なんだよ！じゃないと小さい子が寄って来ないじゃないか！だから持つてんだよ！みなまで言わすなよ。わかれよ！

「黒羽先輩さつきから黙ってますけどどうかしたんですか？」

「ごめん。ちよつとぼうつとしてただけだから。じゃああそこで食べよつか！」

「はい。」

そう言つて俺達は近くにあつたベンチに腰を下ろす。弁当箱を開くと玉子焼き、ウインナーといった定番のオカズが入っている。勿論俺が作った。前の人生でも一人暮らしだったからよく料理してたから味には自信がある！

「先輩のお弁当つて誰が作つてるんですか？」

「勿論俺が作っている。」

「え？親が作つてないんですか？」

そういえば俺親いないけどどう説明したらいいんだろ？死んだつて事にしたら話が重くなるしな。そうだ！海外にいる事にしよう！

「海外に長期出張してるんだよ。だから俺が弁当作つてるんだよ。」

「そうだったんですね。ちよつと貰つてもいいですか？」

「大丈夫だよ！はい、あーん。」

「これは何ですか？」

小猫ちゃんが冷めた目でこつちを見てくる。

「玉子焼きだけど？嫌いだった？」

「そうじゃなくて。なんであーんが必要なのか聞いてるだけです。」

「それは俺がしたいからだよ！」

「私はしたくありません。」

「それじゃあいらない？」

「ぐっ！」

小猫ちゃんがこつちを睨んでくる。そんなに食べたかったのかな？それじゃあ普通にあげようかな。

「ごめんね。普通にあg『わかりました。』え？」

「あくんをしたらしいんですよね。」

「え？ほんとにいいの？」

「はい。ひと思いにやってください。」

まさか小猫ちゃんにあくんが出来るとは最高じゃないか！滅多にない事だ。しつかり脳に刻み込んでおかねば。

「それじゃあ行くよあくん。」

小猫ちゃんが口を開いて待っている。なんてかわいいんだ！そのまま違う物をくわえさせたい！……………おっと邪な考えは捨てなければ。そして俺は小猫ちゃんの口の中に玉子焼きを入れる。

「どう小猫ちゃん？美味しい？」

小猫ちゃんは数回噛んだ後、驚いた表情をし口の中の物を飲み込んだ。

「はい。すごく美味しかったです。あくんが無ければもつと美味しく頂けたのですが。」

「口にあって良かったよ。俺的には眼福ですごく良かったよ！」

「変態です。」

小猫ちゃんが軽蔑してる目でこつちを睨んでくる。

「ごめんごめん。ついかわいくてね。」

「やっぱり先輩はロリコンです。」

「うん。俺はロリコンだよ！だから小猫ちゃんが好きなんだよ！」

「好きっていえばどうにかなると思ってるんですか？」

「いや、思ってる無いよ。けど絶対小猫ちゃんのことを振り向かせてやるって思ってるから覚悟しておいてね！」

「そんな日が来ればいいですね。」

小猫ちゃんには慣れたかの様に軽く流した。これは結構難関だな。どう落としたらいいのかわからないや。けど絶対落としてやるからな！それは置いといて、

「小猫ちゃん。言ってたお菓子あげるよ。」

「ありがとうございます。シュークリームですか。これってお菓子ですか?」

「俺はスイーツもお菓子って呼んでるからね。だって一緒じゃん!どっちも甘いし。」

「黒羽先輩今の本気で言ってます?」

小猫ちゃんが静かに聞いてくる。だがオーラがすごい事になっている。あれ?俺何か言っちゃいけない事言っただけ?どうしてこんなに怒ってるの?

「えくと、小猫さんなんで怒ってるのかな?」

「黒羽先輩そこに正座してください。」

「え?なんで?」

「いいから座ってください!」

「は、はい！」

小猫ちゃんから有無を言わせぬオーラが出されており、俺は素早く正座をした。

「黒羽先輩あなたスイーツとお菓子は同じだと言いましたね。」

「うん。言っただけ。違うの？」

「違います！そもそもスイーツとお菓子では食べるタイミングが違います！まずスイーツは……………」

それからは小猫ちゃんが壊れたかのようにスイーツとお菓子の違いについて説明されて説教もされた。遂には甘い物のいいとこまで話始めた。俺がちよつとでも姿勢を崩すと

「ちゃんと聞いてるんですか？」

とハイライトが消えた瞳で睨んできて崩そうにも崩せない状況。しかも下はコンクリート。もはや拷問である。結局昼休みいっぱい説教されて終わった。足が痺れて歩けなかったのは秘密。

「それじゃあ今日はここまで。明日もちゃんと投稿するように! (誤字にあらず)」

最後に先生が訳がわからない事を言っていたが、授業が終わり、放課後になった。俺は部活道に参加していないのですぐに帰る事にする。

俺が帰っていると廊下の向こうからイツセー、元浜、松田が女子剣道部に追われている。また何かしたのだろう。俺は無視して帰ろうとすると、

「あ、隼人助けてくれ!」

イツセーが俺を見つけ助けを求めてきた。やばい関わりたくないけど無視したら追いかけて来そうだし、ここは助けてやるか、

「助けてやるよ。」

「「本当か？」」

なんか元浜と松田も増えていたがまあいい手間が省けた。

「ああ。女子剣道部のな。」

「「え？……裏切ったなあ隼人ー！」」

「裏切る？俺は最初からお前らを助けるなんて言っていない！お前らが勝手に都合よく解釈しただけだよっ！」

そう言つて俺は3人をしばき倒した。

「隼人君ありがとう手伝つてくれて」

「どうって事無いよ。でも、こいつらには俺が殴り倒したから罪は軽くしてやってくれ。」

「隼人って本当に優しいんだね。」

「それでも無いよ。けどこいつらがまた同じ事したらその時は思いっきりやっていいから。」

「うん。そうするね。今日はありがとう。」

「いえいえ。それじゃあね。」

俺が手を振ると女子剣道部全員が手を振替してくれた。なんか嬉しいね。前の人生はこんな事は無かったからな。ほんとこの世界に来て良かったよ。

帰宅している途中、見覚えのある人に出会った。

「また会ったね！」

「げ、朝のキモイ奴。」

「そこまで言わなくてもいいじゃん。」

出会ったのは朝、道を教えてくれた金髪ツインテールの少女だった。そういえば次はあつたら奢るって約束してたんだつた。まさかこんなに早く会えるとは思っていなかった。これは運命なのか？俺とあの子は運命の赤い糸で結ばれてるのか？

「ここでまた会えたんだし、どこかでお茶しようよ。」

「いやっス！」

「次はあつたら奢るって言ったらわかつたつて言つたじゃないか。」

「もうわかつたつスよ。」

「うん。それじゃあ近くにある喫茶店に行こうか。」

そうして俺達は喫茶店に行くことにした。

喫茶店に入り席に着いた。

「なんでも頼んでいいよ奢るから。」

「じゃあこのメニュー全部っス。」

「うん。大丈夫だよ。けどよくそんな食べれるね。俺は無理だよ。」

俺は笑いながら少女に話しかける。

「へ?じよ、冗談っス!」

少女があからさまに狼狽える。嫌がらせで言っただけつもりがひらりと躲かれ、反撃されたのだ流石に狼狽えるか。まあメニュー全部ってオーダーをされても大丈夫だが。なぜなら俺の財布の中には百万円入っているからだ！雪が一生お金に困らないように馬鹿げた金額に設定した為、今俺の財布は論吉でパンパンだ。

「冗談だったのか。それじゃあ何にする？」

「ウチこんな場所初めて来たっすから、何頼んでいいからわからないっす。」

「そうなんだ。じゃあこのチーズケーキはどう？ここの店の看板メニューなんだけど。」

「じゃあそれにするっす！」

「じゃあ後は飲み物だけだね。紅茶なんてどうかな？ここは紅茶も美味しいんだよ。」

「じゃあそうするねっす！」

「ごめんね。全部俺が決めたみたいで。」

「大丈夫っス。そのかわり美味しく無かったら許さないっスよ!」

「うん。そこは安心していいよ。ここは美味しくていいから。すいません!注文いいですか?」

そう言っつて店員を呼ぶ。

「はい。ご注文をどうぞ。」

「このチーズケーキを2つと紅茶が1つとブラックコーヒーを1つでお願いします。後は紅茶とコーヒーは食後でお願いします。」

「かしこまりました。それでは少々お待ちください。」

そう言っつて店員が厨房にオーダーを通しに行った。

「それじゃあ料理が来るまで何か話そうか。」

「けど何を話つスか？」

「とりあえず自己紹介をしない？俺達お互いの名前知らないだろ。」

「確かにそうつスね。」

「じゃあ俺から、俺は黒羽隼人つて言うんだ。君は？」

「ウチはミッテルトつていうつス！」

この子はミッテルトつて言うのか。見た目どうり外国の人なのかな？それにしても日本語が上手だけど。

「ミッテルトちゃんつて外国の人？にしては日本語上手だね。」

「ウチをちゃん付けで呼ぶなっス！」

「ごめんごめん。なんか付けたくなちやって。」

「腹立つっス！」

「本当にごめんね。もう呼ばないから。許してミッテルト。」

「なんか名前呼ばれるだけで腹立つっス！」

「俺にどうしろと!？」

「死んでくれっス。」

「ミッテルトは酷いな。」

「だから名前呼ぶなっス！」

「けどお前って呼ばれるよりかは、マシじゃない？」

「それはそうっスけど」

「だから名前で呼ばせてよ。俺の事も名前で呼んでいいから。」

「わかったっス！隼人。」

やっぱり名前で呼んでもらえるのは嬉しいね！しかもこんな美少女に言われるともう好きになってしまふ。いや、俺はもうミツテルトの事が好きになってるんだ。愛を囁きたいが、今のミツテルトはガードが硬い。だからどこかで崩れたところ確実に攻めて行かなくてわ。すると店員が料理を運んで来た。

「お待ちせしました。こちらがチーズケーキになります。」

店員が俺達の前にチーズケーキを置いてお辞儀をし何処かに行ってしまった。

「これがチーズケーキっすか？」

「そうだよ。もしかして初めて食べる？」

「そうっす！めっちゃ美味しそうっすね！」

「そうなんだ。ここの店のチーズケーキはね。味が濃厚でチーズケーキだけでも美味しいんだけど、このイチゴのソースの酸味が合わさるとすごく美味しいんだよ！」

俺はミツテルトに熱弁をした。俺はチーズケーキが好物でチーズケーキにかける思いが違う！昔家でもよく作っていた。ここの店は今まで食べたチーズケーキの中でも一番に美味しいものだった。それをミツテルトにも味わって貰いたい。

「そうなんっすか？食べて見てもいいっすか？」

「どうぞ。」

そう言うとミツテルトはチーズケーキを小さく切り口の中へと運んで食べた。すると目を見開いてこつちを見てくる。

「これめちやくちや美味しいっス！」

「だろ！」

「本当に美味しいっス！」

ミツテルトはすごいスピードでチーズケーキを平らげた。だが物足りないらしく、こつちを見てくる。

「ほしい?。」

「ほしいっス！」

目をランランに光らせてこっちを見てくる。もうかわいいな!なんか子犬みたいだな。

「はい。あげるよ。」

「ありがとうっス!」

そう言っつてミツテルトは俺のチーズケーキを食べ始める。俺は店員にコーヒーと紅茶を出してもらおうように伝える。その間ミツテルトは笑顔でチーズケーキを食べていた。

「ミツテルトは笑顔の時間が一番かわいいな!」

「っ!?!……………ありがとうっス……………」

ミツテルトは恥ずかしがりなもチーズケーキを食べていく。その顔は真っ赤になっ

ていたが、夕日の為、分からなかった。暫くして、コーヒーと紅茶が来た。その時にはミツテルトもチーズケーキを食べ終わっており、開いた皿を下げてもらった。

「……………」

「……………」

少しの時間何も話さなかった。けど、決して気まずい訳ではない。互いに夕日を見ていた。俺はコーヒーを飲み終わり、ミツテルトを見ると、まだ飲んでいる最中のようだ。ふと目があつたが顔をそらされてしまう。まだ嫌われてるのかな？これはなかなか難攻不落だな！

そして暫くしてミツテルトも紅茶を飲み終わり、店を出ることにした。

「今日は楽しかったよ！」

「ふん！まあまあ楽しかったっス」

「それは良かったよ!」

「それで……もし良かったら……また一緒に来たいっす。」

「え?」

「ち、違うっす! また奢れっす! 別に一緒に食べたいなんて思っただけっすからね!」

あれ? これってツンデレ? 俺いつ落としたんだ? だがラッキーだ! これで俺のハレムがまた一人増えたぜ! しかもツンデレと来たか。ポイント高いね! 最高だよ! だが、まだ告白するのは早い。もう少し時間をかけなくては。

「うん。また会えたら一緒に食べよう! 俺の奢りで。」

「ほんとっすか?」

「うん。」

ミッテルトの顔が一気に明るくなっていく。何この子めっちゃんかわいいんだけど！

「そ、それじゃあまたっす！」

そう言ってミッテルトは走り去ってしまった。行動全てがかわいいなミッテルトは！絶対俺のハーレムの中に入れてやる！そう思い家に帰った。

のだが、

「隼人から女の匂いがする。」

そう言つて雪がジト目で睨んでくる。

「それは、学校で色んな人と関わったからね。それりやあ付くだろ。」

「違う。他の女と比べて2人だけ匂いが濃い。」

そう言つて雪が睨んでくる。遂にはハイライトが消えてしまった。すげー怖いがそれより、なんで嗅ぎ分けられるのかが不思議でたまらい。雪は犬なのか？

「もしかして私のこと嫌いになったの？」

「それは無い！前にも言ったろ。俺はハーレムを作るのが夢だつて。だから他の子にも手を出すけど、どんな事があるうと俺は雪が1番好きだよ！決して嫌いにはならない。俺が他の子に手を出したからって嫉妬してくれるのは嬉しいけど、決して嫌いになつたわけじゃないから。安心して。それとも俺の言葉は信じられない？」

「ありがとう隼人。隼人の言葉はいつも信じてるよ。でも時々、不安になるの。本当に隼人は私のこと好きなのかなつて。」

俺はそれを聞いて雪を抱き寄せキスをする。
触るだけのキスをするるとすぐに唇を離し、

「大丈夫。俺は雪が1番だから。ずっと1番だから。だから元気出して。」

「うん。」

そう言って雪が俺に背中を預けて来る。俺はそれを受け止め抱きしめる。雪の頬は

ほんのり赤くなっており、嬉しそうな顔をしていた。すると服の裾が引つ張られ振り向くとオーフィスが立っており、

「我也好き?」

オーフィスが少し不安げな表情で言ってきた。

「当たり前だろ! オーフィスも大好きだよ! こっちおいで。」

「ん。」

オーフィスは嬉しそうな顔をしてこっちに来る。俺は雪と一緒にオーフィスも抱きしめる。オーフィスの顔もほんのりと赤くなるが無表情だった。

「2人とも大好きだよ! 絶対離さないからね!」

俺はより一層強く抱きしめる。雪とオーフィスも嬉しように微笑んでいる。この生

活は毎日楽しいな！転生して本当に幸せだよ！雪こう言っってはなんだけど、俺を殺してくれてありがとう。俺は心の中で雪にお礼を言っつて雪達を抱きしめていた。

くミツテルトsideく

「やばいっス！アイツの事が頭から離れないっス！なんで？また会う約束もしてしまっ
たっス！本当にウチはどうしたんっスか！」

と悶えていたが、そこに上司であるレイナーレが降り立った。

「ミツテルト貴方にお問い合わせがあるの？」

「何っスか？」

「こいつを殺して欲しいの」

そして一枚の写真を渡される。中身を見るとそこには隼人が写っていた。

「な、なんでこいつを殺すんつスカ?」

ミッテルトは焦りながらもレイナーレに聞くが、レイナーレは酷く冷たい顔で、

「貴方がこの人間と食事している所を見たわ。」

それを聞いた瞬間ミッテルトの血がさあつと引いた。見られていたつてもしかして、

「もしかしてこいつを殺す理由って……ウチのせいっスカ?」

「ええそうよ。貴女、あの人間の事が好きなんですよ。けど私達のような至高の墮天使が人間と結ばれる訳にはいけないの。だから貴女の手で殺しなさい!好きな人くらい最後は自分の手で殺してあげなさい。その方が相手もいいでしょう。」

「そんな……………」

ミッテルトはその場に崩れ落ちてしまう。

「もし出来ないなら、他の奴に殺してもらおうから。」

それだけ言ってレイナーレは飛び去って行った。その場に残されたのはミッテルト一人だけ。ミッテルトは写真を抱きしめ、ただ泣く事しか出来なかった。

俺の逆鱗に触れた奴は死ぬぜ～

「……………んっ。」

俺が目を覚ますと両腕が重く痺れていた。右にオフィス、左に雪が俺の腕を枕にして寝ていた。はあ雪もオフィスも寝顔かわいいね！俺はそつと二人にキスを落としたり起こさないようにベットを出た。

時刻は5時。起きるにはまだ早い時間なのだが、主婦は朝早く起きないと学校に間に合わないのだ！だつて雪とオフィスに家事やらすと酷い事になる。雪はドジっ子だからやらすと何か壊すからダメ。オフィスは無知過ぎて家事が出来ない。だから必然的に俺がやることにした。

まず俺は昨日洗濯機にかけて洗濯物を干しに行く。干し終わったら、お弁当作り。献立は前の日に決めている為、朝考えて無駄な時間を使う事は無い！何事も計画的にいか

なくては、時間は有料なんだ！無駄な時間を使う訳にはいかない！そんな時間があつたら雪とオーフィスとでイチヤイチャラブラブしてよ！

お弁当を作り終わり時刻は6時。いい時間になってきたため、俺は朝食の準備をする。今日の朝食は、味噌汁、焼き魚、漬け物、白ご飯といった純和風でいく。日本人はお米食べる！パンも美味しいが俺は断然ご飯派だ！異論は認めん！

朝食の用意が出来たが、雪とオーフィスが起きて来ない。俺はしかなく起こしにくい。俺の部屋に入ると二人はお互いを抱き合うように寝ていた。こ、これは！なかなかの絶景じゃないか！幼女二人が抱き合っているのだぞ！これは脳内保存待ったなしだな！だがこんな事をしている訳にはいかない。朝食が冷めてしまう。俺は雪とオーフィスを軽く揺すって、

「雪、オーフィス、朝ごはん出来たよ。早く起きて。」

「……………ん。」

「……………眠い。」

雪とオーフィスはまだ眠いのか目を擦っている。寝起きの顔もかわいいな、この子達は！

「おはよう。雪、オーフィス。」

「……………おはよう隼人。」

「……………ん。おはよう。」

二人は目が半開きままだが徐々に意識が覚醒しているようだ。俺は、早く顔を洗って朝ごはんにするよ。と言って、部屋から出ようとする、雪に服を掴まれ、

「…隼人…おはようのちゆうして。」

「我も。」

や、病んでらっしやる！こ、怖ー！オフィスそろそろ本当にやめて！このままだつたら雪に刺されそう。

「……んっ……じゆるるるるっ……ぷはっ」

オーフィスがやっと離してくれたが、今度雪がキスをしてくる。もちろん舌を入れて。

「……んちゅっ……じゆる……んっ……くちやつ……」

小さい舌で俺の舌を絡めとっていく。ほんとに誰の所為でこんなにエロい子達になっちゃったんだ。全くけしからん！

「んんっ……ちゆる……ぷはっ……」

やっと雪が唇を離してくれた。雪は息が上がっており、肩で息をしている。表情はも

う女の顔になっており、朝からハッスルしたくなるが、してたら確実に遅刻する。それは流石にそれは困るんでね。

「雪、オフィス今はダメだからな。」

「……………うん。わかってる。」

「んっ。」

「それじゃあご飯食べよ！」

「うん！」

俺と2人は一階に降り朝食をとった。

「単人の料理はいつも美味しね♪」

「うん。美味しい。」

「そうか？ そう言われると恥ずかしいな。けどありがとうよ！」

俺は恥ずかしがりなも二人の頭を撫でた。二人も嬉しそうに笑っている、ものすごくかわいい♡今日は学校サボってずっとイチヤイチャしていたい！けどそれは出来ない。俺は学生だからな！

朝食を食べ終わり、シャワーを浴び身支度をして家を出ようとする。

「それじゃあ行ってくるね。」

「うん。行ってらっしゃい隼人。」

「行ってらっしゃい。」

なんかこうゆう日常が本当に幸せだ。俺は二人に手を振り学校へと向かった。

学校に着き、教室に入ると、ニヤニヤして気持ち悪い顔をしたイツセーが近づいて来た。気持ち悪いのでとりあえず殴っておいた。

「痛つてー！いきなり何するんだよ！」

「お前がキモい顔で近寄って来るからだ！」

「理由それだけ!？」

「それ以外何がある？」

「くそ。だが俺は今、非常に気分がいいんだ。なんでかわかるか？」

「知らんし、どうでもいい。だからそこどけ。」

「そう言わずに聞いてくれよ。」

なんかイツセーが涙目・上目遣いでこつちを見てくる。これが雪だったら今すぐに抱きつくのだが、イツセーがやるとすごいキモいな。吐き気がする。

「わかったから、キモい目で見てるな！」

「サンキュー。それでな、さっきの話だけど俺に彼女が出来たんだよ！」

「すまんイツセー。お前がそこまで追い込まれるとは思わなかった。いい精神科を教えてくださいから安心しろ。」

「そんなんじゃないー！」

「もういいんだイツセー。お前はただ疲れてるだけだ。」

「ほんとだって、ほらこれ！」

イツセーがポケットから携帯を取り出し、デイスプレーをこっちに向ける。見てみると黒髪ロングの女性がイツセーと一緒に写っていた。どうやら本当らしい。けどなんでこいつなんだ？こいつのいいところなんて無いの？物好きもいたものだ。

「本当そうだな。とりあえずおめでとう。」

「ありがとうよ！それで頼みがあるんだがいいか？」

「なんだ？」

「俺デートしたこと無いから、どこ行けばいいかわからないから、どこ行ったらいいか教えてくれないか？」

「そんなの自分で考えろよ。」

「考えたけどわからないんだよ。」

「じゃあ彼女と話し合えよ！」

「けどどこでもいいって言ってたし。」

「じゃあ自分の行きたい所に行けよ。他人が考えたデートプランより彼氏が考えたデートプランの方が彼女も喜ぶだろ。」

「それもそうだな。やっぱり自分で考えるよ。ありがとうな！」

「決まったならそこどけ。」

そう言ったらイツセーはすまんと言って自分の席に戻って行った。俺は自分の席に着き、授業が始まるまで寝る事にした。

授業が終わり、今は帰宅している。今日はスーパーで特売をしていた為、両手には買い物袋を下げている。

「持つっス！」

後ろから左の買い物袋がひつたくられる。俺が振り向くとミツテルトが俺の買い物袋を持っていた。

「ミツテルトか。どうしたの？」

「隼人を見かけたっスから話かけたっス！」

「だからって買い物袋取るなよ。」

「だから持つっス！」

「けど重いだろ。渡して。」

「大丈夫っス！これくらいなんでもないっス！」

本当にミッテルトはかわいいな！こんなに健気な奴はそうはいない。絶対ハーレムの中に入れてやる。これは決定事項だ！

「じゃあこっちに持ってよ。こっちの方が軽いし。」

「大丈夫つスよ！」

「けど、女の子に重い荷物持たせる訳にはいかないからね。ほらこっち持って。」

「ちよっ！」

俺はミッテルトの持つてる買い物袋をひったくり、もう片方の軽い買い物袋をミッテルトに持ってもらう。

「……あ、ありがとうつス……」

「大丈夫だよ。」

ミツテルトが下を向き照れている。本当にかわいいな。だがその表情がすぐに曇る。どうしたんだろ？

「ミツテルトどうかした？」

「え？な、何がっスか？」

「いや、表情が暗いと思ってどうかしたのかなって？」

「っ!？」

ミツテルトは一瞬辛そうな表情をしたが、すぐに笑顔に戻るが表情が固く無理して笑ってるようにしか見えない。

「ミツテルトほんとにどうしたんだ？」

「な、なんでもないっすよ！隼人の勘違いっす！」

「そんな訳ないだろ！じゃあなんでそんな辛そうな表情するんだよ！」

ミツテルトの表情はもう笑顔が崩れて凄く辛そうな表情に変わっていた。

「隼人には関係ないっす！」

「関係ない訳無いだろ！俺はお前の事が好きなんだ！だから俺はお前を助けたいんだ！俺に出来ることならなんでもする。だから何が辛いのか教えてくれ！」

俺はミツテルトに訴える。俺はミツテルトが好きだ！だからあんな辛そうな顔されたら助けたくなる。ミツテルトにはずっと元気で、笑顔で居てほしい。だから今のミツテルトの顔は見たくない！

「だったら！」

ミツテルトが叫ぶと背中から鳥のような羽が生えてきた。

「じゃあ私の為に死んでよ!」

ミツテルトは光の槍を手の上に作り、俺の目の前に来て振りかざした。俺は目をつむり、衝撃に備えるが、いつまでたっても衝撃が来ない。俺は恐る恐る目を開けると、ミツテルトは目から涙をポロポロと流し、光の槍を振りかざしたまままで止まっていた。

「……ミツテルト?」

「うう。…なんで殺さないいけないんっすか。殺したくないっす。」

ミツテルトは光の槍を消して俺の胸に飛び込んで来る。ミツテルトはポロポロを涙を流し、

「いやっす。隼人を殺したくないっす。」

と言ってるだけだった。俺は買い物袋を置いてミツテルトを抱きしめる。俺はミツテルトが泣き止むまで抱きしめていた。この時幸いだったのは、周りに人が居なく、この光景を見られなかった事だ。

ミツテルトが泣き止むと、俺達は抱きしめ合ったまままで会話をする。

「ミツテルト。なんで俺を殺そうとしたの？」

「それは……………」

ミツテルトは黙ってしまった。けどこれは聞かなくてはいけない。俺はそいつを殺さねばならないからだ。なぜなら、ミツテルトを泣かせたからだ！俺の好きな奴を泣かせた奴は絶対死刑だ！

「辛いと思うけど言ってくれ。俺がなんとかするから。」

「でも、それじゃあ隼人が危ないっす！」

「大丈夫！俺は強いから。それにミッテルトを泣かせた奴は絶対に許さない！絶対生まれて来たことを後悔させてやる！」

「隼人……………私に隼人を殺させようとしたの r 『ドスン！』」

ミッテルトが話していると胸に凄い衝撃がはしる。俺は胸を見てみると槍が俺とミッテルトを串刺しにしているのが見える。口から何かが出てきた。たぶん血だろう。

「…ドーナ…シーク…何を……………」

「やはり貴様は奴を殺さなかったか。レイナーレ様の読み通りだな。レイナーレ様からもしその人間を殺さなかったらついでにお前も殺せと言われていたんでね。」

ミッテルトはハット帽を被った男と話していた。話を聞く限りこの槍を放ったのはあの男だろう。すると槍が消え、俺達の胸からとめどなく血が流れ始める。

「…ミツテルト…大丈夫…か？」

「…隼人ごめん…あたしの…所為で…こんなになっちゃって…」

ミツテルトは俺に寄り添うように倒れこんでくる。

「ミツテルト大丈夫か！しつかりしろ！死ぬな！」

「……ごめん隼人……ごめん……ウチも隼人の事……す……き……だったよ。」

「おい、しつかりしろ！ミツテルト目を開けてくれ！頼むから！頼む……。」

俺は泣きながらミツテルトの頬を叩いている。

「ふん。やっと死んだか。人間なんかと一緒にしようとするからだ！」

俺はそれを聞いて完全にキレた。こんないい子を殺して、しかも殺した理由が俺と一

緒いたって言ったから殺したってこいつ達は言ってるのか！絶対に許さない！簡単には殺さないぞ！

『雪！オーフィス！来い！』

俺が叫ぶとすぐに雪とオーフィスが現れる。

「隼人急呼んだけど何かあつ……ってどうしたの隼人？怪我が出てるじゃない！」

「隼人どうしたの？」

雪とオーフィスは俺の心配をしてくれるが今はそんな事をしている暇はない。

「雪、そこに倒れてる子を俺の自宅に運んでくれ。」

「でも、もう彼女は……。」

「大丈夫！ 『復元する世界』」

俺は『復元する世界』を発動させミッテルトの体を24時間前の体に戻した。

「な、なんだその能力は？ それにオーフィスだと!? 貴様何者だ！」

「黙れ雑魚!!」

「貴様、人間の分際で私を雑魚だと舐めるなよ！」

ドーナシークは俺に向かって光の槍を放つがオーフィスによって防がれる。

「雪、早くあの子を俺の家に。オーフィスはここ一帯を結界を張ってくれ。俺はこいつを殺す！」

雪とオーフィスは自分も手伝うつと言おうとしたが出来なかった。隼人から殺気と魔力が無造作に溢れだし怖気づいてしまったからだ。あんなに優しい隼人がこん

なに狂気じみた殺気を放つとは思わなかったからだ。

「わかった隼人。けど絶対に怪我しないでね。」

「ああ約束するよ！」

雪は隼人の言葉を聞きミツテルトを担いで転移した。

オーフィスはこの間に結界を貼り終わっており、もうこの空間の中には隼人、オーフィス、ドーナシックしか残ってなかった。俺はミツテルトを傷つけたクソ野郎を睨み付け、

「さあかかって来いよ！一方的に蹂躪してやる！」

俺はそう叫びクソ野郎に襲いかかった。

これから起こるのは目をつむりたくような一方的な暴力だった。

俺の彼女がこんなに正妻なわけがない!

「さあかかって来いよ! 一方的に蹂躪してやる!」

そう言ってドーナシークに襲いかかる。

「オーフィスが相手なら勝てなかったが、人間相手なら楽なものだ!」

ドーナシークは二つの光の槍を作り、隼人の方に投げつけるが、もうそこには隼人の姿はなかった。

「なっ!?!どこに行った?」

「お前の後ろだよ!」

「っ!？」

慌ててドーナシークは振り向くが、隼人はドーナシークに回し蹴りをし、地面に叩き落とす。

「ガハッ!？」

「おいおい。これくらいでへばるなよ。まだまだ序の口だぞ。」

隼人はドーナシークを踏みつけ、羽を鷲掴みにする。そして、隼人はドーナシークの羽を筆りとした。筆りとした場所から血が溢れるように出ている。

「があああああっつっ!」

ドーナシークは激痛で絶叫する。隼人はそれをものともしないでもう片方の羽も筆りとした。

「これで空は飛べないな！ 堕ちた天使が羽を奪られて空からも落ちたな。本当に滑稽だな！ 三下！」

「……………ぐあつ……………き、貴様ああ！」

「まだまだ殺さねーぞ！ お前にはまだまだまだ苦痛を味わってもらおう！」

隼人はそう言うのとドーナシークの右腕を踏みつぶした。そして次は左腕を踏みつぶした。ドーナシークは激痛の余り意識が飛んでしまっていた。

「……………がつ……………あ……………」

「おい、起きろ！」

隼人はドーナシークの横っ腹を思い切り蹴る。ドーナシークは衝撃で目を覚ます。隼人はそれを確認すると、今度は右脚を踏みつぶす。左脚も同じように潰す。

「た、助けてくれ……」

ドーナシークは歯をガチガチと震わせながら命乞いをする。それは隼人に油を注いだだけだった。隼人はドーナシークを睨み付ける。右手でドーナシークの首を絞め、片手で持ち上げる。ドーナシークは苦しそうにもがくが、腕も脚がない状態なので、反撃が出来ない。

「お前は、ミッテルトを簡単に殺そうとしたくせに、自分が殺されそうになったら命乞いか。巫山戯るなよ!!」

隼人はドーナシークの腹を思い切り殴る。殴った事により肺が1つ潰れドーナシークの口から血を吹き出す。

「……………がはっ……………た、たの……………む……………助けて……………くれ」

「絶対にお前は殺す！だがまだ死なせないぞ！」

隼人は左手をドーナシークの目のすぐ近くまで近づける。

「な、なにを………する………」

「こうすんだよ!!」

隼人は勢いをつけて左手をドーナシークの目に突き刺し、眼球をえぐり出した。

「ぎゃあああああああ! 目が…目が………」

「片方だけじゃあバランスが悪いよな!」

隼人はもう片方の目もえぐり出す。眼球を握り潰しドーナシークの口の中に入れ込む。

「おら! 自分の目の味はどうだ!」

「……………、殺して……………くれ」

遂にドーナシークは自分から死ぬ事を望み始めた。

「殺してやるよ!!」

隼人は右手を離し力を溜め、ドーナシークの胸を思い切り殴った。隼人の腕はドーナシークの体を貫通し、右手にはまだ動き続けているドーナシークの心臓が握られていた。

「……………がつ……………」

「さっさと死ぬ。」

隼人が心臓を握り潰すとドーナシークはちりとなって消えた。

「はあはあはあ。」

「……………隼人。」

今まで黙っていたオフィスが話しかけてくる。

「はあはあ……………どうしたオフィス?」

「隼人、大丈夫?」

「俺は大丈夫だよ。っ!」

オフィスがいきなり俺に抱きついてきた。

「どうしたオフィス? てか、血がつくから離れて。」

「いや。」

「どうして?」

「隼人、別人みたいだった。我、あんな隼人いや。」

この時気づいたがオーフィスが少し震えていた。たぶん俺はオーフィス達には凄く優しくなったからさつきみたい的一面を見て少し怖がつてしまったのかも知れない。

「ごめんオーフィス。もう大丈夫だから離れて。」

「うん。」

オーフィスは離れてくれるが、その表情はまだ暗い。本当に怖かったんだろう。いつも知っている俺が全く別人みたいな行動をとったからね。なんとかして安心させてあげなければ。

「大丈夫オーフィス!絶対にお前の前ではこんな事をしない。誓う。」

「いや。もうあんなにならないで。」

「……それは約束出来ない。俺は好きな奴があんな事をされて許せるほどお人好しじゃないんだ。だから約束出来ない。」

「……。」

オーフィスは何も言わず俯く。俺はオーフィスの頭を撫でる。

「けど大丈夫。オーフィス達に危害が加わらない限り俺はいつもの俺だよ。心配してくれてありがとうねオーフィス。大好きだよ!」

「ん。」

オーフィスは気持ち良さそうに目を細める。本当にこの子かわいいな! いつもは無表情だから偶に見せる笑顔が凄い破壊力がある! p r p r したいぜ!

「それじゃあ帰ろうか。」

「うん。」

俺はオーフィスと手を繋いで自宅へと転移した。

家に転移すると、雪が俺に飛びついてきた。

「隼人大丈夫？怪我してたけど。」

「大丈夫だよ。ほらこの通り。」

俺は自分のお腹を雪に見せる。穴が空いていた場所は何事も無かったかのように綺麗だった。しかも傷の跡すら残っていなかった。それもそうだろう自宅に転移する前

に『復元する世界』で自分の体を24時間前に戻したのだ。それを見た雪はホッと胸をなで下ろし、

「隼人が無事でよかった。」

「ごめんね。心配かけて。」

「ほんとに心配したんだから!」

雪は頬を膨らませて怒っているが、全然怖くもないし、むしろかわいくらいだ。俺は雪に近づき、膨れた頬を指で押す。すると、ひゆるひゆるっと雪の口から空気が抜ける。なにこれめっちゃ面白い!もう一回やりたいなウズウズ

「もう!私は怒ってるんだからね!」

そう言つて雪はポカポカと殴つて来るが、痛くない。しかも顔を真っ赤にして怒っているのが微笑ましく見えて来る。俺は雪の頭を撫でる。

「ごめんごめん。本当に悪かったって。」

「全然謝ってるように見えない！」

「そんな事ないぞ！本当に心配かけて悪かったと思っている。」

「じゃあなんでそんなニヤニヤした顔で言ってるの！」

「それは雪の頭を撫でてるからだ！」

「意味がわからないよ！」

「雪はいつもかわいいなって思いながら撫でてるからね！」

「うっ／＼／＼／」

雪は照れて反撃が出来ない様子だな。本当に雪はかわいい。何度も何度も言うてるが雪は一番かわいい。俺は雪を抱き寄せ耳元で、

「本当に心配かけてごめん。」

心から雪に謝った。雪もちやんとそれを受け取ったのか。

「うん。」

それだけ言って俺を抱きしめ返して来る。

少しして俺たちは離れて、ミッテルトが寝ている部屋に行った。ミッテルトはまだ寝ているらしく起きていなかった。

「それでこの子は誰なの隼人？」

「最近仲良くなったミッテルトって言うんだけど。なんか上司の命令で俺を殺そうとし

ただけど、それを実行しなかったから殺されかけたんだ。」

「ふーん。また手を出したのね。」

雪がジト目で見てくるが、

「ま、いいけどね。」

雪はジト目をやめ微笑んできた。あれ？おかしい。いつもだったら嫉妬してくれるのに今日はしてくれない。も、もしかして俺の事嫌いになったのかな？こんな次々に女の子に手を出すからもう飽きられちゃったのかな？もう人生が終わった。雪のいない人生なんて考えられない。死のう。

「雪ごめん。俺が全部悪んだよね。」

「え？何言ってるの？」

「俺の事嫌いになっちゃったんだよね。こんなに女の子に手を出すから。だから嫉妬もしてくれ無くなっちゃったんだよね。ごめん雪の気持ちに気づいてあげられなくて。」

「隼人！」

雪が突然大声で俺の名前を呼ぶ。俺は何事かと思い雪のほうを見る。すると雪はさつき以上に怒っているようだった。さつきみたいたいなかわいい怒り方ではなく、本当に怖い怒った顔だった。

「いい隼人！私は隼人がどんだけ好きな人作ろうともう私は何も言わない！なんでかわかる？」

「え？俺の事嫌いになったから？」

自分で言っていて泣きたくなってきた。雪は俺のすぐ前まで来て、両手で俺の顔を抑えて俺の目を見てはつきり言った。

「違う！私は隼人が私の事が一番好きって言った事を信じているからよ！どんなに好きな人が出来ても私が一番って隼人が言ってくれたから私は安心出来るの。だから私は隼人が好きな人を作っても構わない。」

「雪……………」

「けど今の隼人はどう？全く私の事信じてないじゃない！あれだけ私の事が一番一番言ってくれてたのに。あれは嘘だったの？」

「嘘じゃない！雪が一番好きだ！けど雪は俺の事どう思ってるのかあんまり聞かないから不安で。」

「そんなの好きに決まってるじゃない！」

「っ!？」

「好きでもない人にキスなんてしないし、好きでもない人と一緒に住まない！ましてや

一緒に寝ない! 私も隼人が大好きなの! 一番好きなの! もし今度そんな事言ったら本気で怒るからね!

雪からこんなにはつきり好きだと言われたのは初めてだ。心が凄く暖かい。さつきまで疑っていた自分を殴りたい。ここまで自分を思ってくれてるなんて、本当に雪は俺の好きな彼女だ。これからは絶対に雪の信頼を裏切らない! 俺はそれを心に決め、

「うん。約束するよ。俺も雪の事を信じる。ありがとう雪。それとこれからもよろしくね。」

「全く隼人は……………んっ。」

俺達はキスをする。このキスはこれからもお互いが一番という誓いのキスでもあった。数秒がたち、俺達は唇を離す。お互いに微笑み合いながら手を握る。そんなやり取りを見ていたオーフィスは羨ましそうに隼人達をみていた。

「……ん……………んは……………」

ミツテルトが目を覚ました為、俺達はミツテルトのそばに行った。

「ミツテルト大丈夫か？」

「……はや……と……？」

「ああ俺だよ！」

俺はミツテルトの手を握り呼びかける。ミツテルトも徐々に意識を覚醒させていったのか、

「隼人よかったっす！」

そう言って抱きついてきた。俺も抱き返しながら頭を撫でる。

「大丈夫だよミツテルト。もう安心して。」

「よかったっす。本当によかったっす。」

ミツテルトは泣いてしまっていた。俺は背中をさすり、大丈夫大丈夫と言いつつ聞かせた。暫くしてミツテルトが泣き止み、話を始める。

「ミツテルト。まず体の調子は大丈夫?どこか痛むところはない?」

「大丈夫っす。隼人は大丈夫っすか?」

「俺の心配もしてくれるのか。嬉しいよ。俺は大丈夫!ほらこの通り傷なんて無いよ。」

「本当っす。はっ!そういえばドーナシックはどうしたっすか?」

「あいつなら殺したよ。当たり前だろ。ミツテルトに手を出したんだ、殺すしかないだろ。」

「そうっすか。」

ミツテルトは少しだけ落ち込んだ表情を見せる。まあそうだろう。前は仲間だったんだ、決して悲しく無い訳は無い。だが相手は自分を殺した奴だぞ。なんでそんな気を落とす。

「どうしてミツテルトが気を落とす。あいつはミツテルトを殺そうとしたんだぞ！」

「でも仲間だったっす。だから少しだけ悲しくっす。」

「ミツテルトは優しいな。」

「そんな事ないっす！隼人を殺そうとしたし。」

「けど殺さなかった。充分ミツテルトは優しいよ。けど優しい過ぎだよ。自分を殺そうとした奴にまで優しさはあげなくていいよ。」

「そうっすね。」

「うん。それじゃあ次にこれからミツテルトはどうする?」

「ウチはもう帰る場所がないっす。仲間の所にも帰れないっす。」

俺はミツテルトの言葉を聞き、雪とオーフィスのほうを見る。二人も今から俺が言う事がわかったのか無言で頷いてくれた。本当に好きだよ二人とも。ありがとう。そう思い俺は口を開く。

「帰る場所が無いなら俺の家に居なよ!」

ミツテルトは驚いていたが、

「それは悪いっすよ!しかも私なんかと居るとまた襲われるかもしれないっす!」

「大丈夫だよミツテルト。俺はミツテルトと一緒に暮らしたいだけだし、もしまたミツ

テルトを襲う奴が現れたら俺がそいつを塵にしてやるから安心して。」

「うう。でも。」

「でもじゃない！これは俺からの命令だ！拒否権は無い！」

「わ、わかったつすよ！」

「うん。それでいいんだ。それじゃあ俺の家族の紹介するね。」

「家族つすか？」

「そう。雪、オーフィスこつち来て。」

俺が雪とオーフィスと呼ぶとトコトコとやって来た。トコトコ走って来る二人もかわいいな♪prprprしたい！……おっとこんな事してる場合じゃない紹介しなくては。

「こっちの黒髪の子がオーフィス。」

「オーフィス!?!」

ミツテルトが驚き、その場から後ずさりをする。

「?そうだけど知ってるの?」

「知ってるも何も、最強のドラゴンっスよ!」

「へえオーフィスってそんなに強かったんだ。」

オーフィスの方を見るとえっへんと胸を張っているオーフィスの姿があった。本当にかわいい♡

「それでこっちの白髪が雪。」

「雪です。よろしくね。」

「よろしくっス。」

二人は笑顔で握手をしている。なんか微笑ましいなこの光景。ずっと見ていたいや。

「それでこの雪は俺の未来のお嫁さん！」

「え!？」

「エへへへへへ。」

ミッテルトは驚愕し、雪は顔がゆるゆるになっていた。

「隼人の未来のお嫁さんって事は、もしかして二人って付き合ってるっスか？」

「うん！」

ミッテルトは凄く悲しそうな顔をする。俺はミッテルトの気持ちを知っている。好きな人がもう付き合ってるのだから、ショックを受けるのは当たり前。俺はそれを踏まえた上でミッテルトに、

「ミッテルト。俺はミッテルトが俺の事をどう思っているのかも知っている。それを踏まえて俺と付き合ってくれないか？」

「え？」

「言ってる事が無茶苦茶なのはわかっている。けど俺もミッテルトが好きなんだ！絶対にミッテルトのことも幸せにしてあげる。他の子達と同じ位愛してやる。だから俺と付き合ってほしい。」

「……………。」

ミッテルトは黙ってしまつて何も答えない。少し時間が経つとミッテルトは俺の手を握つて来て、

「本当にウチの事幸せにしてくれるっスか？」

「ああ誓う。神に誓つて。」

それを聞いてミッテルトは顔を赤くしながらも、

「そ、それじゃあ……よろしくお願いします……」

「ああこれからよろしくなミッテルト！」

そして俺とミッテルトはキスをした。

こうして、俺の彼女と家族が一人増えたのだつた。

俺って潜入捜査苦手なんだよね

ミツテルトが家族になって次の朝。いつもの時間に目を覚ましたのだが、いつものように両脇には雪とオーフィスがいるが、何故か俺の上にミツテルトが乗っている。

「すう……すう……」

ミツテルトがかわいい寝息をたてて寝ている。ミツテルトの寝顔もかわいいな！けどどうしよう。ミツテルトだけでも起こさないと準備が出来ない。俺はミツテルトの頬を軽く叩き、

「ミツテルト起きて。」

「んっ……すう……すう……」

「頼む起きてくれよ。朝ごはん作りたいたんだ。」

頬を叩き続けているのだが、ミッテルトは熟睡しているらしく全く起きない。俺は悪戯がしたくなり、ミッテルトの耳元で、

「起きないとキスしちゃうぞ！」

「っ!?!……………スウ…スウ…」

「なるほどキスをして欲しいのか。仕方ないな。」

俺はミッテルトの唇の近くまで唇を持って行き、触れるギリギリで止めた。

「流石に寝ているのにキスするのは可愛そうだな。」

「ん。……………ん。……………ん。」

「はあ可哀想だけど普通に起こすか。」

「キスしてっス！」

「おっとミツテルト起きていたのか。」

「知ってた癖に白白しいっス！」

「まあね。だって下手なたぬき寝入りをしてるのが凄く可愛くてね。ついからかいたくなってるね。」

「ぐっ。隼人は意地悪っス！」

「そうでもないよ。」

俺はミツテルトの唇に触れるだけのキスをする。

「おはようミッテルト。」

ミッテルトは最初はびっくりしていたが、顔を赤くしながらも笑顔で、

「おはようっス隼人！」

そして俺達は雪とオフィスを起こさないように1階へ降り朝の準備を始めた。

6時くらいになり、雪とオフィスも起きてきたところで俺達は朝食を取ることにした。今日の朝食は味噌汁、漬物、おにぎり、といった簡単なものにしてある。これはミッテルトも協力してくれた。これはまるで愛の共同作業だね♪けど一番嬉しかったのはミッテルトが家事が出来ることだった。幼女二人は家事が出来ないから俺のいいあいだに家事をしてくれるのは嬉しい。だって休日しか、家の掃除が出来ないんだもん。凄く助かる。ミッテルトも快く受けてくれたし、ほんとミッテルトには頭が上がるよ。

朝食を食べ終わり、食器を洗おうとするが、

「ウチがするから大丈夫っスよ！隼人は学校に行く準備をするっス！」

ミツテルトが俺を押しつけて食器洗いをしてくれた。こんなところもミツテルトはポイント高いよな。まだ幼いのにしつかりしてるっていうか。こんなところが本当にかわいい♡俺は後ろからミツテルトを抱きしめる。

「な、なにっスか!？」

ミツテルトが顔を真っ赤にして狼狽えている。本当にかわいいなミツテルトは！俺はミツテルトを強く抱きしめ、

「ミツテルトありがとうね。俺はミツテルトを好きになって本当に幸せだよ。」

「う……………う……………」

ミツテルトが顔から湯気が出るかと思うくらい顔を真っ赤にして硬直してしまう。

俺はミッテルトの首筋にキスを落とすとミッテルトの体がビクン！と跳ねる。それを見ていた雪は何かぶつぶつと虚ろな目で何か呟いていて、オーフィスは指をくわえて、物欲しそうな顔でこつちを見ていた。俺はそろそろ離れないと幼女二人に時間を取られると思いミッテルトから離れる。

「それじゃあミッテルト後はよろしくね。」

「……りよ、了解っす。」

俺はミッテルトにそれだけ言って学校へ行く準備をする。

「それじゃあ行ってくるね。」

「「「いつてらっしやい」「」」

三人に見送られながら学校に行った。

学校に着くとイツセーが俺の近くまで来て、

「隼人！お前は俺の彼女の事を覚えてるか？」

は？こいつは何を言ってるのだろう？散々自慢したじゃないか！

「覚えてるも何もお前が自慢してたじゃないか！」

「ほらみろ！やっぱり嘘じゃないだろ！」

イツセーが松田、元浜の方を向き言う。松田と元浜は俺の近くまで来て俺の肩に手を置く。

「あんな奴の妄想に合わせなくていいんだ。」

「あいつは二次元と三次元の区別がつかなくなったただけだ。」

「てめえらしい加減にしろよ！」

イツセーはそう叫びながら松田と元浜を追いかけて行つた。すると廊下の向こうに血のように紅い髪の女性がこちらを見ているのが見えた。あの人はリアス・グレモリー先輩。駒王学園の二代お姉様として有名な人だ。イツセーもリアス先輩がこちらを見ている事に気づき鼻を伸ばしている。リアス先輩が少し微笑んでどこかに行つてしまった。リアス先輩は外国の人となつてゐるが、何か人とは違ふ気がする。そう、サキュバスのような。

「まあどうでもいいが。」

俺はロリコンだからね。あんな年増は好きじゃないんだよ。しかも胸のあの脂肪なんなの？もう少し脂肪燃焼しろよ！まあそれは置いて、早く教室に入る。

今は昼休み。今日は中庭で食べようと思ひ外に出る。外は暑すぎもせず寒すぎもせず、丁度いい陽気だった。俺は中庭のベンチを腰をかけ、お昼ご飯を食べ始める。周りを見るとカップル達がイチヤイチヤしながら、ご飯を食べている。俺はそれを羨ましな

がら見ていると、

「先輩はカップルを見るのが趣味何ですか？悪趣味です。」

「小猫ちゃん俺はそんな趣味は無いよ！」

俺は声ができる方を向きながら言った。そこにはジト目で睨む小猫ちゃんが立っていた。その手にはお弁当が握られていた。

「小猫ちゃんもお昼？良かったら一緒に食べない？」

「甘いものはありますか？」

「愚問だね小猫ちゃん！そんなの持つてるに決まってるじゃないか！」

俺はそう言い懐からクッキーを出した。これは俺が朝作ったクッキーだ。このクッキーには野菜を練りこんでいる為、野菜嫌いの雪に野菜を少しでも食べてほしいと思い

作ったものだ！結構上手く作れたので美味しかった。雪もこれなら食べられると言って喜んでいたな。

「わかりました。ご一緒します。」

「それじゃあ隣にどうぞ♪」

「失礼します。」

小猫ちゃんはそう言って俺の横にちよこんと座る。小猫ちゃんが可愛らしいお弁当を開けると、なんとも美味しそうなおかずが並んでいた。

「小猫ちゃんその唐揚げ1個くれないかな？」

「じゃあそのミニハンバーグを下さい。」

「はいよ。」

俺は小猫ちゃんのお弁当箱にミニハンバーグを入れて唐揚げを貰おうとすると、手を払われ、

「ほら先輩。あくんです。」

小猫ちゃんがいい顔をして唐揚げを差し出す。これはされるのは嬉しいがこんな人目の付くところでやられると流石に恥ずかしい。

「ちよ、小猫ちゃん恥ずかしいからやめて！」

「先輩もこの前やったじゃないですか。お返しです。それとも食べたく無いんですか？」

「ぐっ！」

この前とは、立場が逆転してしまっている。小猫ちゃんも少しは恥ずかしいのか顔を

赤くしているが、この前やられた仕返しが出来て嬉しいのかいい笑顔だ！

「わ、わかった。食べるよ。」

「それではあ〜ん。」

俺は小猫ちゃんの唐揚げを口の中に入れる。美味しいのだが、恥ずかし過ぎてあんまり味の詳細までは分からなかった。いつもはやる側だったが立場が変わるとこんなに違うものなのだ。

「先輩顔真つ赤ですよ。」

「小猫ちゃんの所為だよ！」

「クスクス。それで唐揚げはどうでした？」

「美味しかったよ。あれって小猫ちゃんが作ったの？」

「はい。」

「そうなんだ。美味しかったからまた作ってよ！」

「気が向けば。」

「それでお願ひするよ。」

そうして俺と小猫ちゃんの甘い昼休みは終わっていった。これにより俺と小猫ちゃんが付き合っている疑惑が一気に広まって行つた。ちなみに変態三人組が俺に突っかって来たのでもちろん殴り倒した。

「ただいま。」

授業が終わり、帰宅すると、リビングから雪とオフィスが顔を出す。

「おかえり隼人」

雪とオーフィスが俺の所に走って来て飛びついて来る。俺はそれに応じて雪とオーフィスを抱きしめる。抱きしめていると遅れて、エプロン姿のミッテルトが出迎えてくれた。

「おかえりっす隼人！」

「ただいまみんな！」

なんかこの風景、俺がお父さんとミッテルトがお母さん、子供が雪とオーフィスっていう家庭みたいじゃない？こんな家庭もいいな。だが俺の一番嫁は、雪だ！すまないなミッテルト。俺は雪とオーフィスを離し、

「ミッテルト、エプロンしてるけど何か作ってるの？」

「そうっす！今日はウチの自信作のカレーを作ってるっす！」

「カレーか。いい匂いだね。ミッテルトが作ってくれたんだ楽しみにしているよ。」

「じゃあちよつと待ってるっす！」

ミッテルトは嬉しそうにリビングに戻って行く。俺も自分の部屋へ行き制服を脱いでリビングに戻ると、

「あ、イイところに帰って来たっす！ちよつとお皿出してくれないっすか？」

「それくらい大丈夫だよ。」

俺はお皿を四人分出す。

「ありがとうっす！後は大丈夫っすから休んでいてほしいっす！」

「うん。それじゃあ後は頼むね。もしまた手伝つて欲しかったら言つてね。」

「氣遣いありがとうっス！」

俺はそれを聞くと雪とオーフィスの所へ行き二人を抱きしめながら、ご飯が出来るのを待った。十分くらい経つて準備ができた為、俺達はテーブルに着いた。

「おお〜！」

雪とオーフィスは2人声を揃えて呟いた。ミツテルトの作ったカレーは雪やオーフィスが食べやすいように野菜を細かく切っており、しかも甘口という氣遣いの見える温かいカレーだった。

「それじゃあいただきます。」

「いただきます。」

俺はカレーをひとすくいして口の中に入れる。

「凄く美味しいよミツテルト！」

「へへ、ありがとうっす！」

「ぐっ美味しい。」

「………………。」ガツガツ

俺がミツテルトを褒めるとミツテルトは顔が緩み嬉しそうに笑っている。雪は悔しそうにしながらも美味しいと言って食べている。オーフィスは気に入ったのか無言で食べている。俺もゆっくりとだがカレーを食べている。この心のこもったカレーを噛み締めながら。今日の夕食は笑顔が絶えなかった。

夜になり俺は魔力を発生させて訓練をしている。これは体に魔力を馴染ませる為に行っている。この前の戦闘で俺は思い知らされた。俺は平和ボケをしていると。これ

からは俺の家族に降りかかる火の粉を全て俺が払っていく。その為に更に今まで以上に強くならなくてはいけない。俺は誰にも負けない世界最強になるんだ！そう思い俺は馴染ませる魔力の量を上げていった。その魔力量はもう魔王クラスをゆうに超えており、オーフィスの全力と変わらないくらいの魔力を体に馴染ませていた。

訓練を終えて自室に戻ると、ミッテルトが俺のベッドで寝ていた。

「自分のベッドがあるのに何で俺の部屋で。」

俺は頭を抱えながらも嬉しくて顔を緩める。そして俺はミッテルトに近ずき、キスをする。

「ミッテルトはかわいいな。……愛してるよ。」

それだけ言って俺もベッドに入る。今日はミッテルトを抱き枕にして寝ようと思いき、ミッテルトに抱きつき眠りについた。

実はこの時ミツテルトは起きており、朝のためき寝入りのリベンジをしていた為、キスされた事も、愛してると言われた事も全部知っており、心の中で絶叫していた事は隼人は知らない。」

「そんな俺はまだ夢でも見てるのか？」

俺がなぜこんな事を言っているのかと言うと、イツセーがリアス先輩と一緒に登校しているのだ！俺は信じられなくて頬をつねるが夢じゃなかった。それを見て悲鳴をあげるもの、倒れるもの、イツセーに殴りかかるもの、殴ったのは松田と元浜だな。けどなんでイツセーがリアス先輩と？まあどうでもいいが。俺はそのままイツセー達に関わらずに学校へ入って行った。

授業が終わり帰る構えをしていると、

「「「「「キャー—————!!!」」」」」

突然クラスの女子達が叫び出す。俺は何が起こったと思い周りを見るとそこには、イケメンで有名な木場祐斗がいた。

「えっと君が兵藤一誠君だね。」

「なんのようだよ!」

イツセーが木場を睨見ながら言う。イツセーいくらイケメンが嫌いだからってそんなに邪険にしなくてもいいじゃないか!それを木場は気にしてないかのように笑顔で答える。

「リアス・グレモリー先輩の使いで来たんだ。」

「っ!?!」

それを聞いたイツセーが何か心当たりがあるらしく体を震わす。リアス先輩の使い？

「俺はどうしたらいいんだ？」

「付いて来てもらえるかな」

イツセーと木場が一緒に教室から出ていく。クラスの女子達が叫び、腐女子の奴等がはあはあ言っていたが今は無視だ！俺はあいつらをつけるぜ。なんか面白そうだし。

イツセーと木場の後をつけて旧校舎まで来ていた。そこの二階の奥の部屋に二人は入っていった。俺は二人が入って行った部屋の扉まで来て扉に耳を当てる。すると、

「……………いやらしい顔」

とうとう小猫ちゃんの声が聞こえた。あれ？なんで小猫ちゃんがこんな所に？その

前にいやらしい顔？もしかしてイツセーか！まさかイツセーが小猫ちゃんにいやらしい事を!?あいつは死刑確定だ！そして俺は手に魔力を溜め、思い切り扉を殴った。

バキツ!!

俺が魔力を乗せて殴った事により、扉は砕け散った。

「「「っ!?!」」」

その場にいた全員が驚いていたが、俺はそれをもともしないで、イツセーに乗りかかる。イツセーはバランスを崩し床に倒れこみ馬乗り状態になる。

「てめえ小猫ちゃんにいやらしい事したのか!」

「え?なんの事?それよりなんで隼人が居るんだよ!」

「じゃかしい!お前は俺の小猫ちゃんに手を出したんだ殺されても文句は無いよな!」

俺がイツセーの腹に一発叩き込もうとすると首元にひんやりとした物が触れる。見てみると、木場が剣を握って俺に向けていた。

「動かないでね。動いたら容赦しないよ。」

木場が冷たく俺に言ってくる。俺はそれを手で掴み、魔力を込めて握り潰した。

「なっ!?!」

木場は壊された事に驚いているようだったが俺は今はそのような事してる場合じゃない！一刻も早くイツセーを殴らねばならないんだ！そして気を取り直してイツセーを殴ろうとすると、

「先輩。」

「あ、小猫ちゃん大丈夫だった？もう大丈夫だよ俺が来たからには小猫ちゃんにいやら

しい事する奴は俺が殺すからね。だからちよつと待っててね。イツセーを殺すから♪」

「ちよ、ちよつと待てよ！誤解だから！」

「そんな言い訳聞か！」

イツセーを殴ろうとした時、俺の横腹を思い切り殴られた衝撃がはしる。見ると、小猫ちゃんが俺の横腹を殴っていた。俺の体結構鍛えているから女の子のパンチ喰らっても大抵は大丈夫なのになんで？

「こ、小猫ちゃんいいパンチだね……一緒に世界を目指さない？」

「お断りします。」

世界への夢をあつさり断られ、小猫ちゃんが追撃で俺の顔面を殴り俺の意識は完全に刈り取られた。

次に目を覚ますと、手足を椅子に縛られていて全く身動きが取れなくなっていた。

「ようやく目が覚めたようね。黒羽隼人君」

俺は正面に座っている、リアス先輩を見た。あれ？なんかみんな殺気だつてない？どうして？

「単刀直入に聞いわ。あなたは何者なの？」

「え？普通の人間ですが？」

それ以外答えられない。だって俺ちゃんとした人間だし。実はドラゴンでした。つてオチも無い普通の人だぞ。

「そんな訳無いでしょ！普通の人間がああ魔力で強化された扉を壊せる訳無いでしょ

リアス先輩が驚いたように俺に質問してくる。これはやっぱりミツテルトのような人達なのかなこの人は。

「はい。使えますよ。この縄を解いてくれればイツセーを使って実演しますが？」

「なんで俺で実演すんだよ！」

「ほう。される心当たりが無いと。」

「すいませんでした。許して下さい！」

イツセーが土下座をして謝ってきた。まあ十発殴るだけで許してやるか」

「隼人心の声が漏れてる。てか十発殴って生々しい。」

「じゃあ死ぬ手前まで殴ってやろうか？」

「マジでごめんなさい！」

「そろそろ話を戻していいかしら。」

「すみません。」

リアス先輩が青筋を立ててこっちを睨んでいた為とつきに謝ってしまった。

「それでその魔法を見せてもらいたいんだけど。」

「それじゃあこの縄を解いてもいいですか？」

「ええ。祐斗解いてあげなさい。」

「いえ、大丈夫ですよ。」

それだけ言って魔力で体を強化し、縄をひきちぎった。それを見ていたリアス先輩達は目を見開いて驚いていた。

「それが魔法なの？」

「いえ、まだこれは序の口です。本当の魔法はこれ。」

俺は自分が壊した扉の前まで歩き、『復元する世界』を発動させる。

『『復元する世界』』

俺が魔法を発動すると、一瞬で壊れた扉が元に戻った。

「「「え!」」」

これには全員が驚いていた。いいねその顔。面白い顔してるよあんたら。小猫ちゃんは驚いた顔もかわいいね♪

「黒羽先輩何か余計な事考えませんでした？」

「気のせいだよ小猫ちゃん。」

なんでこうも女の子は感がいいんだろう？俺にはわからないよ！

「それがあなたの魔法なの？見たこと無いけど」

まあそうだろうな。君達とは違う世界の魔法だからね。

「俺のオリジナルですからね。能力はあらゆるものを24時間前の状態に戻す能力。これを俺は『復元する世界』へダ・カーポ』と言っている。」

「そうだったの。あなた私の眷属にならない？」

「眷属？それってどういう意味？」

「言ってなかったわね。」

そう言ってリアス先輩の背中から蝙蝠の羽が生える。そして俺以外の全員が蝙蝠の羽を生やす。あれ？イツセーも？

「私達は悪魔なの！」

そう言ってリアス先輩が胸をはる。イツセーはリアス先輩の胸に釘付けになるが、俺は小猫ちゃんの悪魔姿に釘付けになっていた。蝙蝠の羽が生えてる姿もかわいいね小猫ちゃん♪

「上級悪魔は自分の眷属を持つことが出来るの。私はその眷属探しも兼ねてこの人間界にいるの。」

「なるほど。それで俺の珍しい能力が気に入って眷属にしたいと。そういうことだな」

「ええ、どう？ 悪魔になれば何万年も生きられるようになるわよ。」

「嬉しい誘いだけどそれは断るよ。俺は人間のままで充分だから！」

まあ雪が多分俺の寿命弄ってるだろうと思うし、結局は同じ事だと思うしね。

「そう………わかったわ。気が変わったらいつでも言つて頂戴。」

「気が変わればね。」

まあ気は絶対変わらないがな。小猫ちゃんがどうしてもって言われたら考えるがね。

「貴方にはオカルト研究部に入ってもらおうわ」

「え？ なんで？」

「それはそうでしょう！ 貴方の力は野放しにする訳にはいけないわ。それでも私はこの

領地を管理しているの。」

「それは困る！」

流石に遅くなつては、雪達に心配かけてしまう。それだけは絶対に避けたい！

「なぜよ！」

「帰りが遅いと俺の家族が心配します！」

「大丈夫よ！部活は深夜にするから。たまにでいいから出てくれたらいいから。」

「分かりました。偶にですが顔を出します。のでもう帰っていいですか？」

そう言つて俺は窓を指をさす。外はもう日が沈み暗くなっていた。

「ごめんなさい。もう帰っていいわよ。」

「それじゃあ失礼します。」

そうして俺は急いで自宅に帰ったが案の定、3人は心配心配しており、少しの間説教をされた。

リアス達に関わったことによりこれから隼人達は厄介事に巻き込まれて行くのだった。

バイサーに合掌をしてあげてくれ

俺がオカルト研究部に入部して数日が経ち、だんだんとオカルト研究部のみんなと慣れてきた頃、今俺は部室でイツセーが怒られているのを見ている。

「二度と教会に近づいちゃ駄目よー」

イツセーはアーシアっていう女の子に出会って教会まで送ってあげたそう。けどイツセーって馬鹿だよな。わざわざ敵対している場所にのこのこと行ってるんだもん。よく殺されなかつたな。リアスさんもすげー怒ってるしとりあえず合掌。

「ねえねえ小猫ちゃん♪」

「……なんですか?」

小猫ちゃんがジト目でこつちを見てくる。その目はよからぬ事をしようとしてるで

しよと言う目だな。

チツチツチツ。小猫ちゃんは甘いな。考えが甘すぎるぜ！そんな小猫ちゃんには甘いものあげないと、

「今日、モンブラン作ったけど食べる？」

「食べます！」

小猫ちゃんが目をキラキラさせて俺の所に寄ってくる。

そんな物欲しそうな目で俺を見るな！俺も小猫ちゃんが欲しくなるじゃないか！

俺は手提げ袋からお皿とフォークとモンブランを取り出して小猫ちゃんの前に置く。

「はい。どうぞ小猫ちゃん。」

「いただきます！」

小猫ちゃんはフォークを上手に使いモンブランを切り口の中に運び入れると、いつも

の無表情が崩れ幸せそうな顔をしていた。

「どう？美味しい？」

「はい、美味しいです！」

「それはよかった。また今度スイーツを作ったら味見してくれない？」

「喜んで！」

小猫ちゃんは味見役が出来ることが嬉しいのかすごい笑顔で俺に笑いかけてくれている。

ズキューン!!俺のハートを射止めやがったな小猫ちゃん!その笑顔は反則だぜ!

俺は手を小猫ちゃんの頭に乗せ撫でる。

「小猫ちゃんは可愛いな！」

「またそれですか。……………けど今回は多めに見ます。」

「くふ〜！小猫ちゃんはいつ俺の事を好きになってくれるのか……」

「たぶんありません。」

「相変わらず厳しいね小猫ちゃん！けど絶対に諦めないからね！」

「そうですか。」

俺と小猫ちゃんとのイチヤイチャはまだまだ先のようにだ！気長にアタックするか。

俺は小猫ちゃんを撫でながらそう思った。小猫ちゃんは撫でられるのは満更でもないらしく、気持ちよさそうに目を細めていた。

その時周りは、

「なんであの二人イチヤイチャしてるの？」

「あらあら、うふふ。」

「僕もわかりませんね。」

「クソ〜！隼人奴爆ぜてしまえ！」

残りの部員達は二人のイチャイチャを見ながらブラックコーヒーが飲みたくなっていた。

それから暫く小猫ちゃんを撫でて、帰ろうとしていると、

「部長。討伐の依頼が大公から届きました。」

「そう。わかったわ！これから行きましょう。」

リアスさんと朱乃さんが立ち上がり、『はぐれ悪魔狩り』に行くと言い出したが俺は早く帰らないと俺の嫁達に怒られてしまうので無視して帰ろうとするが、俺の腕を小さな手が掴んだ。しかも痛いぐらいに握り締めて。

俺は腕を掴んだ相手を見ると小猫ちゃんがジト目でこつちを見ていた。

「黒羽先輩どこに行くんですか？」

「いやね、もう暗いし早く帰らないと家族が心配するからね。」

「連絡すればいいじゃないですか。」

「門限が厳しいからね。それに俺が居なくてもなんとかなるでしょ。」

よし、これで帰れる。小猫ちゃんには悪いけど早く帰らないと最凶の嫁2人が怖いんだよ！分かってくれ。

すると小猫ちゃんが俯き、そして、

「どうしてもダメ？」

小猫ちゃんが涙目+上目遣い+今にも消えそうな弱い声の三コンボでたたみかけてくる。やばいめっちゃ断りたいけど断れない。

「……はあ……わかったよ」

「ありがとうございます」

小猫ちゃんはさつきまでの涙目などをやめて笑顔で俺を見てくる。

（クソ！こんなかわいい事されて断れるわけないじゃん！小猫ちゃんなんて子！もう小悪魔感が半端じゃない。……はあ……雪とオーフィス怒るだろうな……）

俺はそんな事を考えながらみんなと一緒に廃墟に向かった。

その頃黒羽家では、

「最近隼人帰りが遅くない？」

「隼人遅い。」

「遅いっスね。どこで油売ってるっスかね。」

「ねえみんなで隼人を探しに行かない？」

「我、賛成。」

「ウチも賛成っス！」

「見つけ次第連絡してね。みんなで説教してやるんだから！」

「うん。」

「了解っス！」

黒羽家のリビングで最強幼女2人と強くない堕天使が作戦会議をしていた。

「強くない言うなっス！」

堕天使口リが叫びながら隼人散策の為3人は夜の町へと消えて行った。

俺達は今、はぐれ悪魔が居ると言われている廃墟に来ていた。そこは心霊スポットとして有名で、入って行った人は必ず帰って来ないとまで言われている。

「まさかそれが悪魔の仕業だったなんて」

「ん？どうしたんですか先輩？」

「いや、なんでもないよ。」

「そうですか。」

そう言つて廃墟の中へと入つて行く。中からは鉄の臭いがしていた。けどこの臭い、なんか血が乾いた時みたいないな臭いがする。すると小猫ちゃんもそれに気づいたのか、

「………血の臭い」

そう言つて小猫ちゃんは制服の裾で鼻を覆つた。

やはり血の臭いだった。小猫ちゃんは断言したけど鼻がいいのかな？

すると廃墟の奥から何かがこっちに近づいて来た。

「不味そうな臭いがするぞ？でも美味そうな臭いもするぞ？甘いのかな？苦いのかな？」

そんな気持ち悪い言葉を発しながら悪魔がこっちに近づいてくる。

「はぐれ悪魔バイサー！ 貴方を消滅しに来たわ！」

リアスさんがまだ見えぬ悪魔に宣戦布告をすると、

ケタケタケタケタケタケタ……

と、さつきとはまた違う意味で気色悪い笑い声が廃墟の中に響き渡った。

暗がりから姿を現した悪魔は上半身が裸の女性で下が巨大な獣の姿で尻尾に蛇が付いている異形の姿だった。

はつきり言って気持ち悪い。有名なキメラを気持ち悪くしてみたみたいだ。しかも上人型とかケンタウロス？とも思ってしまう。

「主の元を逃げ、己の欲求の為に暴れまくるのは万死に値するわ！ グレモリー公爵の名において、貴方を消しとばしてあげるわ！」

リアス先輩がバイサーを指をさして宣言した。

決まったー！ 流石がリアス先輩。カッコつけるところはカッコつける。そこにシビれる、憧れるー！

「ごさかしいい！その髪のように真っ赤に染めてやる！」

そう言つてバイサーはドスドスと地響きを立ててこちらに向かつてくる。

（いや〜この悪魔最大の死亡フラグ立てちゃったよ。）

俺はそんな事を思いながらリアス先輩の指示を待つ。ぶっちゃけ早く帰りたいたので俺が倒してもいいが、返り血を浴びるのが嫌なので大人しくしている。

「雑魚ほどよく吠えるものね。裕斗！」

「はい！」

木場がリアス先輩の指示でバイサーに襲いかかる。

（へえ。結構速いんだね。まあ俺ほどじゃないけどね！）

俺がそんな事を思っていると、リアス先輩がイツセーに悪魔の駒の特性について説明し始めた。

「イツセー悪魔の駒にはそれぞれ特性があるの。裕斗の『騎士』は『騎手』となった者の

と叫びながら小猫ちゃんを踏み潰そうと巨大な足を振り上げる。

プチン！

「次は小猫ね。あの子の駒は『戦車』。その特性は…つてどこ行くの隼人！」

俺は魔力で体を強化し、小猫ちゃんがいる場所まで高速移動で向う。

途中リアス先輩が何か言ったがそんな事はどうでもよかった。今は小猫ちゃんを踏み潰そうとしている奴を殺さなくては！

そして小猫ちゃんの所まで来るともう足がすぐそこまで来ており、どう足掻いても逃げられそうに無かったが、

「おらああー！」

逃げる気なんてさらさら無かった。俺は魔力を拳に溜めて、バイサーの足を殴りつけた。すると凄いい衝撃が走り、バイサーの足が千切れ飛んだ。

「ギャアアアアッガッ!？」

「うるせーんだよ! 黙れ!」

俺は足が千切れ飛んだ事によりバランスを崩したバイサーの体に乗れ、バイサーの首を締めていた。

「てめえ小猫ちゃんを踏みつぶそうとしたな? お前それがどんな事か分かってやってんのか? もし、小猫ちゃんの綺麗な肌に傷が付いたらどうしてくれるんだ! ああ? 何か答えろよ!」

もう完璧な不良口調でバイサーを攻める。

「ガッ……アッ……ガッ……」

「ちゃんと喋ろよ!」

そうやって俺はバイサーの首を更に強く締める。

バイサーは喋りたくても隼人が首を締めつけていて話せなかった。バイサーは堪らず、尻尾の蛇で隼人を攻撃する。

「ちっ」

俺は舌打ちをしてバイサーから手を離し、その場から離れる。バイサーはやつと息ができるようになり、むせながらも肩で呼吸をしていた。

俺はもう一度右手に魔力を溜める。すると小猫ちゃんが俺の近くにやって来て、

「先輩。ああ言ってくれるのは嬉しいのですが、私はあんな奴には負けません。」

「そうは言ってももし小猫ちゃんの綺麗な肌に傷が付いたらどうするんだい？俺はそれが心配で。それと嬉しいかったんだね。言ってよかったよ！」

「本当に先輩は変態ですね。」

小猫ちゃんがジト目でこつちを睨んでくる。

そんな睨まないでよ。だって本当に傷が付いたら大変じゃない。こんな美少女に傷が付くなんて俺は絶対に許さない！」

「び、美少女ですか……………」

「あれ？言葉に出ちゃってた？それにしても照れてる小猫ちゃんもかわいいね。」

俺達は脇目もふらずにイチヤイチャしていた。

あれ？何か忘れてるような？まあどうでもいいか！

「私の前でイチヤイチャするなあああ!!」

そう叫びながらバイサーが突進してきた。

だが、俺はバイサーを睨み付けて、

「今は小猫ちゃんとイチヤイチャしてんだ！邪魔すんじやねえええ!!」

俺はバイサーの近くまで高速移動をし、今まで右手に溜めていた魔力でバイサーを殴りつけた。その魔力は絶大でバイサーを跡形もなく吹き飛ばした。

俺は高速移動して小猫ちゃんの所に戻り、

「さあ気を取り直してもう一度イチャイチャしよう？」

「……………」。

小猫ちゃんは無言で俺をジト目で見てくる。

そして周りを見て見ると、リアス先輩が頭を抱えており、朱乃先輩と木場は苦笑いを浮かべており、イツセーはぼかんと口を開けて硬直している。

「何この空気？」

「「先輩（貴女）（おまえ）のせいだよ！」」

「え？」

オカルト研究部みんなからツッコまれた。

「隼人のせいでイツセーに教えてあげられなかったじゃない！」

リアス先輩が子供のように怒っていた。

「すいません。ついカッとなつてしまいました。」

「小猫はあれくらいで、傷は付かないわ！」

「すいませんでした。」

俺は土下座をして謝っているがなかなか許してくれない。そんなにイツセーに教えてたかつたのだろうか？それだったらこの後にでも教えたらいいのに。そんな事を

思っていると、

「はあ。もういいわ。早く帰りましょう。」

やっと許しが出たので俺は土下座をやめて立つ。

（やっと終わった。なんでこんな年増に土下座しなくちやならん。小猫ちゃんならいくらでもするがな！さてようやく帰れる。絶対怒ってるよな。あの三人。）

そんな事を思っていると、

「「見つけた（っス）！」「」

うーん。聞きなれた声が聞こえるぞ。

俺は錆び付いたロボットののようにギギギという効果音を出しながら後ろを振り向くと、たいそうご立腹の嫁三人が立っていた。

オワタ＼（＾o＾）／

嫁さんは見た！

「「見つけた（っス）！」」

俺はギギギと音をたてながら振り向くとたいそう立腹の嫁三人が立っていた。

「隼人これはどうゆう事？」

「……………」

「説明するっス！」

嫁達が目にも光を宿して無い状態で睨んでくる。俺は少し後ずさり、逃げようとするが、

「どこ行くの？ねえどこ行くの？」

いつの間にか移動していた三人が俺の腕を掴み、聞いてくる。もちろん光が宿って無

い。

(ヒイイイイ! やばい、病んでらっしやるこの嫁達。た、助けてー!)

俺はすぐさま土下座をして、

「すいませんでしたあああああつ!」

もう顔を地面にこすりつけて謝った。すると雪が、

「隼人顔をあげて」

「雪……」

雪が笑顔で俺に顔をあげてるように言ってくれた。俺は雪の優しさに触れ嬉しくなり顔をあげる。雪はそつと俺の顔に手を伸ばし頬に触れる。そして、がちりホールドしてきた。それも痛いくらいに。

「ゆ、雪さん？」

「ん？」

「い、痛いのですが」

「あれぐらいで許してもらえる思った？」

雪が凄いい笑顔で笑いかけてくれるんだが、その目に光が宿って無かった。

「で、ですよね〜……」

「大丈夫。死にはしないわ。ただ……」

雪はそこで言葉を切る。俺はなんとなく後の言葉がわかるが念の為聞いてみる。

「ただ？」

「死にたいと思うくらいに苦痛を与えてあげる」

「……………」

雪の言葉に賛同するかのよう後ろでミッテルトとオーフィスが頷いていた。俺は言葉を失い、雪に引きずられていた。

今まで、ポカントとしていたオカケンメンバーははつとなり、

「ちよつと待ちなさい!」

雪達を取り囲むように戦闘態勢を取る。雪達はそれを冷たい目で睨む。

「貴女達は隼人をどうしようとしてるのかしら?それに墮天使も居るようだし、もしかして貴方達が最近この町でいろいろしている墮天使の仲間だったりするのかしら。」

「……………」

雪は何も言わずリアス先輩を睨みつけ殺気を出している。オカケンメンバーは更に警戒を強め魔力を滲み出している。

「雪達もリアス先輩達もそこまでです！」

俺は雪とリアス先輩の間に入り仲裁に入り戦闘を辞めさそうとするが、雪は戦闘態勢をとかなかった。俺は雪の頭を撫でて落ち着かそうとする。

「……………わかった」

雪は不服ながらも戦闘態勢をといた。

「ごめんなさいリアス先輩。明日説明しますので今日は帰りますね。雪達も今日説明するから今日は帰ろう。」

「……………わかった」

「わかったわ。必ず説明しなさいよ!」

「わかりました。でも今回は俺のせいでこんなになりましたけど、今度また雪達に剣を向けたら……皆殺しにしますから。そのつもりで。」

俺はそれだけ言っつて雪達と一緒に自宅へと帰っていった。

リアス先輩達は俺の残した言葉と殺気に震え、少しの間その場を動けずにいた。

「隼人」

黒羽家では今、正座させられてる俺と、嫁三人による尋問会が開催しようとしていた。

「はいいい！」

声が裏返つてしまい、体をガタガタと震わせて雪達の顔色を伺ってみるが、その顔はどれもゴミを見るような目で睨んでいた。

「何か言い訳はある？」

「言い訳して言い訳？」

ゴキッ！

「ギヤアアアア」

場を和ませようと冗談を吐いたが、ミッテルトによつて腕の関節を外された。俺は激痛のあまり絶叫しのたうちまると。雪達はそれを冷やかな目で見るだけだった。

「そんな冗談が言える状態だと思っているの？」

「すいませんでした!」

俺は土下座をして謝るが、雪は俺の頭を踏みつけてきた。

(雪の足が、プニプニして気持ちいい)

もう少しでMに目覚めそうになりながらもなんとか堪え雪達に説明をした。もちろん踏みつけられた状態で。

その間にオーフィスとミツテルトに蹴られたり、肩を外されたり、関節技をかけられていた。

「なるほど。最近帰りが遅かったのはその悪魔達に正体がばれたからなのね。」

「しかもばれた理由が、勘違いで隼人の狙っている子を助けようと魔法を使ったからっスか。」

「隼人、バカ」

「返す言葉もないです……」

俺の説明を聞きやっとな足を退けてくれた。だが俺は正座のまま座っている。崩そうとすると鋭い睨みを突きつけくるのだ。

「それでなんでその事を黙っていたの？」

「そ、それは……………」

「もしかしてあの悪魔達に口止めされてたの！あの悪魔達抹殺してやる！」

雪が殺気をバンバン出し、その後ろでは殺気を出しながら準備体操をしているミツテルトと魔力と殺気を溢れさせて立っているオーフィスの姿が見えた。

今からオカケンメンバーを抹殺しに行くかのようにだったので俺は慌てて止める。

「違うから口止めされてないから！だからそんな殺気だないで」

「じゃあなんなの？」

「それは……オカケンメンバーに気になる子が居るから一緒にいたいなく思っていたんだけど。けどそれ言ったら雪達が止めるかな〜って思ったので言いませんでした。けど雪達が嫌で家に帰らなかつた訳じゃないからそれは分かってください。」

「はあ、そんなことだろうと思つた。」

雪はため息をついた。そして俺に抱きつき、

「わかつた。許してあげる。隼人は直ぐに他の子に手を出しちゃうのはもう慣れたし」

「許してくれるの?」

「ええ。けど今度から私達もそのオカルト研究部に行くことにするから。それじゃないと隼人と一緒に居れないし。」

「わかつたよ。じゃあ明日みんなを紹介するから、呼んだら来てね。」

「うん。」

俺はなんとか許してもらい、明日オカケンメンバーに雪達を紹介するということで落ち着いた。

「じゃあ最近あんまり一緒に居られなかったから今日はみんなといっぱいイチャイチャしようね！」

「「うん！」」

そうして俺達はイチャイチャして過ごした。

それはもう長い時間イチャイチャしていた為、寝たのは夜中の3時になってしまった。

もちろんいつも通りに起きたのだが、眠すぎて朝ごはんを少し焦がしてしまった。

授業が終わり、今は放課後。

昨日の説明をする為にオカルト研究部の部室まで足を運んだ。扉を開けると、オカケンメンバーは全員集まって居るようだった。部室の中は俺が入って来たことにより、ピーンと空気が張り詰めている。

「それで昨日の事を話してくれるんでしょうね」

重々しい空気の中リアス先輩は口を開き昨日の説明をするようにと言ってきた。俺はソファアーに座り、リアス先輩と対面する形となった。

「もちろんです。その前に雪、オフィス、ミッテルト」

俺がそう言うと三つの魔法陣が部室の中に現れる。リアス先輩達は警戒をしたが、俺の殺気により手を出せないでいた。

魔法陣から雪達が現れて、

「隼人ー!」

雪がいきなり俺に抱きついてきた。これにはリアス先輩達も呆気にとられてポカんとしていた。1人を覗いて。

「は、隼人が遂に小学生にまで手を出したー!」

イツセーが発狂したように叫んだ。まあ絵面としては確かにそう見えてしまうが多分雪の年齢って……これは考えないでおこう。あまり女性の年齢を聞くものじゃないからね。まあ雪は所謂合法ロリというやつだ。

雪はイツセーの方を向き、

「私小学生じゃないし!何勘違いしてるの?キモイし死ね!」

イツセーに向かって暴言を吐いた。しかも目がマジだった。イツセーはそれを聞いて膝から崩れ落ちてしまった。それほどショックだったんだろう。

「雪、言葉遣いが悪いよ。例えそれが気持ち悪くてどうしようもない相手だったとして

も雪はそんな言葉遣いをしたらダメだよ!その前にイツセーに話かけちゃダメだよ穢れちやうから。」

「うん!あんな蛆虫野郎とはもう話さない!」

俺は雪の頭を撫でながら注意をし、雪もそれを理解してくれたのか笑顔で頷いてきた。俺は雪が可愛すぎて雪を抱きしめた。雪も抱きしめ返して来てくれて最高の気分だった。

だが、

「いつまでイチャコラしてるっすかあ!」

すぱぱーん!

ミツテルトがいつの間にか出したハリセンで俺と雪の頭を思い切り叩いた。俺達は頭を抑えながらミツテルトに、

「ミツテルト痛いじゃないか」

「痛いよミツテルト」

「痛いじゃないっス！ここに何しに来たんっスか！」

「え？雪とイチャイチャ？」

ずばーん!!

頭に雷が落ちたかと思うくらいの衝撃がきた。

「ミツテルト今のは流石にやばいよ」

「隼人が巫山戯るからっス！私達を紹介しにここに来たんでしょ？それだったらさっさと紹介するっス！」

「ちえっ、ミツテルトはノリが悪いな。」

「もう一発くらうっスか？」

「いえ、結構です。」

俺は雪を離し、リアス先輩達を真剣な眼差しで見直す。リアス先輩もそれがわかったのか真剣な目で見返してきた。

俺はまずミツテルトを呼び隣に座らせる。

「1人1人説明します。こっちの墮天使はミッテルト。イツセーを殺した墮天使の元仲間です。」

「っ!？」

イツセーは驚愕の顔を浮かべ、リアス先輩は睨むようにミッテルトを見る。ミッテルトも少し気まずそうな顔をして俺の手を握ってくる。俺はその手を握り返しリアス先輩を睨む。

「確かに前はその墮天使の仲間でしたが、今はなんの関わりも無いです。」

「それを信じる証拠はあるの?」

「このミッテルトは仲間に1回殺されかけています。」

「っ!?!……それはどう言った理由で?」

「……ミッテルト言っつていいか?」

「……大丈夫っス」

ミッテルトはそう言っつて手を強く握ってくる。

思い出さなく無いのだろう。俺を殺そうとした事、仲間を殺されかけた事も、俺もそれに答えるように強く握る。

「ミッテルトは仲間から俺を殺せと命令を受けていた。それでもミッテルトは俺を殺さなかつたんだ。それをあいつらは命令を実行しなかつたミッテルトと俺をまとめて殺そうとしたんだ。それが殺されかけた理由だ。」
「そう……貴方はなぜ隼人を殺さなかつたの？」

リアス先輩はミッテルトを見る。

それを聞いたミッテルトは顔を赤くしながら、

「そ、それは……やっぱ言えないっス！」

そそう言つてミッテルトは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

リアス先輩もミッテルトの行動を見てわかつたのか、なるほどと呟いていた。

「ミッテルトはそれから俺達と家族になつて今は楽しく過ごしています。だからあの墮

天使とは今は一切の関係はありません。これで信用してもらえますか?」
「ええ信じるわ。それとさつきは疑って悪かったわね。」

そう言つてミツテルトに頭を下げる。

それを見たミツテルトは慌てて、頭を下げる。

「頭をあげてほしいっス!元は私達のせいで迷惑をかけてますし、こちらが謝らなければいけないっス。本当にすいませんでした。」

少して両者は頭をあげる。そして微笑みあつていた。どうやら和解出来たみたいでよかつた。

「よかつたなミツテルト!」

ミツテルトの頭を撫でて笑いかける。

ミツテルトも嬉しそうに笑つていた。

そして次にオーフィスを呼んで座らす。

「こちらはオーフィス。俺の家族だ！」

「オーフィスってあのオーフィス？」

リアス先輩は慌てたように聞いてくる。

「多分当たってます。最強のドラゴンのオーフィスです！」

「我、オーフィス。」

オーフィスの名を聞いてイツセー以外のオカケンメンバーが驚いていた。

「部長あの子ってそんな強いんですか？」

「ええ。神すら恐れたくらいよ。」

「えーーーーー！あんなに小さいのに」

「イツセー。強さは大ききで判断したら駄目だ。まだお前には分からないかもしれないが、強者は纏っている魔力が違う。オーフィスは無限の龍神って言われていて魔力は無限なんだ。だからお前が逆立ちや突然変異したところで勝てないんだよ。勿論このオカケンメンバーも同様に。」

俺はオーフィスを撫でながらオカケンメンバーにオーフィスの力を自慢してみた。
イツセーは叫びながらオーフィスを見ていた。

俺は次に雪を隣に座らせる。

「こちらは雪。俺の家族です。」

「どうも皆さん。黒羽雪です。」

雪は軽くお辞儀をして、オカケンメンバーを見る。そして小猫ちゃんを見てジト目になる。小猫ちゃんも何故かジト目へと変わり睨み合っていた。

「雪どうした?」

「別に…」

そう言つてそっぽを向いてしまう。

何故だ?

「それでその雪って子は貴女の妹さん？」

「義理の義妹です！」

「隼人の将来のお嫁さんです！」

「「「え!?!」」」

雪が核爆弾を投下してしまった。

(Oh nooooooooooooooooooooo!)

俺は心の中で絶叫し、雪の顔を見る。雪はやってやったって顔をしていた。やめて雪さん。これじゃ俺は義妹に手を出す変態と思われないですか！なに？もうロリコンで、充分変態だ！だって？これ以上変態の項目を増やしたくないんだ！ロリコンで義妹に手を出す変態って学校に知れ渡ったら俺もう学校行けない！

だが真実な為否定ができない。

「え、えつと……………それは本当なの？」

「……………ちが『そうです！』……………そうです」

「私達は愛を誓い合っています！隼人が結婚出来る歳になったらすぐ入籍するつもりです！ねえ隼人」

「入籍は聞いてな『ねえ♡』……はい……」

雪は俺の腕に絡み付き、勝ち誇った顔で言ってくるが、何故か怖い。そして、

「……………」

小猫ちゃんがさつきから汚物を見るような目でこつちを見てくる。小猫ちゃんそんな目で俺を見ないで!!俺のライフはもうゼロよ!

「えーと……お幸せに」

リアス先輩が顔を引きつらせながらそんな事を言ってきた。雪はそれを聞き嬉しくなったのか俺の腕を強く抱き締め、

「はい。幸せになります♪」

雪さんなに言ってるの?ほら、そんな事を言うから小猫ちゃんがこつち見てくれなく

なったじゃないか！雪もうやめて。これ以上傷口に硫酸かけるのやめて。これ以上は死んじやう！

「雪ちよつと黙っててもらえるかな？」

「なんで？」

「これ以上この場の空気をカオスにしたくないから。」

そうさつきから、リアス先輩は頭を抱え、姫島先輩と木場は苦笑い、小猫ちゃんは目すら合わせてもらえず、イツセーに至っては血の涙を流し、ミッテルとオフィスは羨ましそうにこつちを見ている。

なんとか立て直したいがもう無理な位置まで来ていると思う。もうどう修整したって俺のダメージは絶大って事が確定してしまっている。つまり

＼（^o^）／オワタ

俺の人生はもうお先真つ暗だ！一生変態のレッテルを貼られて過ごさなければならなくなってしまう。

俺は立ち直れなくなり項垂れる。

「まあ、そういう事なんで」

「え、ええ。こちらも敵じゃないとわかったから。」

俺達は気まずい雰囲気の中話を進めた。その間も雪は俺に抱きついていて、最終的にオーフィスまで抱きついてきた。凄く嬉しいが、小猫ちゃんの目線が痛い。まるで刺し殺すような目線で睨んでくる。

それからの少し話し合い、雪達を部屋に来てもいい事にしてもらった。それから話し合いが終わり、小猫ちゃんに話しかけると、

「こ、小猫ちゃん……」

「……………」

目も合わせてもらえず、無視までされて、俺の心はもうブレイクしそうだった。

「小猫さん……」

「話しかけないでくださいゴミ野郎。」

「ぐはっ!!」

隼人 HP (ハートポイント)

4000

隼人は小猫ちゃんのダイレクトアタックにより3999のダメージ

隼人 HP (ハートポイント)

1

「小猫ちゃん今度飛び切り美味しいスイーツを作つて来るから！」

「ゴミ野郎が作つた汚物なんて食べません！」

「ごはっ!!」

隼人 HP (ハートポイント)

1

隼人は小猫ちゃんのゴツトハ〇ドスマツシャー(物理)をダイレクトにくらい1000
00000ダメージ

隼人は精神的にも肉体的にも小猫ちゃんに折られてしまった。

それでも諦めずに話しかけて、今度この町で一番高いスイーツを奢ることなんか
機嫌を直してもらった。

それから俺達は自宅へ帰り、雪の説教をして、一緒にお風呂に入り、一緒にベットインした。

ん?一緒にお風呂入ったのか!だって?勿論だろ!三人仲良く入ったよ!何が悪いんだよ!イチヤイチヤして何が悪いんだよ!勿論エロいことは………してないぞ!

イチヤイチヤしていた為気づかなかった。窓の外から俺達を見ていた白い猫がいた事に。